

桶猫

ヨコテ

畑仕事の帰り、末松忠久は畦の先に妙な音を聞いた。

獣が唸っている。凝視すると、それは犬だった。野犬が四匹、小さな何かを取り囲み、そろりそろりと隙を窺いながら回っている。圧倒的な優位にも拘わらず、捨て鉢の反撃を恐れているのか、野犬たちは手出しを躊躇しているようだった。

村の近くとはいえ、野犬は時々出る。おそらくイタチでも見つけたのだろう、放っておいてもよかったが、なりの大きいものがよってたかるといふ凶は気分が悪い。忠久は肩にしていた鍬をゆっくりと下ろし、野犬の群れへ近づいた。大きな声で脅かしてやれと思ったその刹那、野犬たちは、ぎゃいとほざき、文字通り尻尾を巻いて逃げ出した。何であれ、その小さなものの存在に四匹の犬は心底恐れおののいたということだろう。

忠久はさらに近づいた。野犬たちに囲まれていたものを確認すると、それは猫だった。白と黒の斑で、横っ腹に、くの字の模様がある。忠久はその模様に見覚えがあった。

「なんだ、この前の桶猫ではないか。桶に入れられて川を流れてきたと思ったら、今度は野犬に囲まれて……なんとも不運なやつだな。それにしても犬を相手に、しかも四匹だ、噛み殺されておかしくなかったのに、よく撃退できたものだな」

優しく声をかけ、手を伸ばすと、猫の方でも忠久を覚えていたのか、その顔を忠久の手にすり寄せてきた。可愛らしい顔からは想像もつかないような、びゃあ、と少々不気味な声で鳴く。猫は喉に傷を負っていた。酷くはなさそうだが、白い毛が朱に染まっていて痛々しい。さすがに犬を四匹も相手にして無傷では済まなかったようだ。

「前に助けたときも妙な声で鳴く猫だと思ったが、一段と恐ろしげになったな」

忠久が笑いながら揶揄して云うと、不服を訴えるかのように猫は再び、びゃあ、と啼いた。

忠久は猫をそっと拾い上げた。

「家に帰ったら傷の手当てをしてやろう。こう見えても多少の心得はあるから安心しろ。それにしても、まるで刃物でやられたような傷だな……」

ひとりの一匹は暮れかけた陽を背に家路を急いだ。桶猫は忠久の懐の中で不思議な程おとなしくしていた、まるで忠久の言葉を理解したかのように。夏の終わりにしては身を震わせる程のひんやりとした風が吹いていった。

桶猫がやってきて、忠久は小さな喜びを感じていた。たとえ畜生とはいえ、何ものかが傍にいてくれるというのは心地よかった。猫のことだからすぐにもふらりと何処かへ行ってしまおうと思っていたが、しばらくは居着くことに決めたようだ。あれから三日がたった。喉の傷はまだ痛々しく、その声も不気味なままだった。完治したとしても、元が元だからそれほど代わり映えはしないかもしれないが――。

名前は“くう”とつけた。左の横腹にあるくの字の文様にちなんで、最初は“く”と短く呼んでいたのだが、隣に住むお梅婆さんが餌などを持ってきてくれた折に、忠久が呼ぶのを聞き違えたのか“くう”と呼んだ。とりたてて訂正する程のことでもないのに、忠久も以来“くう”と呼んでいる。お梅婆さんも隣家の新顔が気に入ったとみえ、さしたる用事がないのに戸口を覗いては、赤子をあやすような声をくうに投げかける。そして母親のような繰り言を忠久に云う。

「雌猫なんかじゃなくて、嫁さんに来てもらったらどうだい？」

忠久は苦笑いを浮かべるしかなかった。そんな忠久を尻目に、お梅婆さんは持ってきた食べ物をえびす顔でくうに与える。

三年前、遠縁にあたるお梅婆さんを頼ってこの村に来たときから云われていたが、忠久が煮え切らない態度を続けるので最近は大下火になっていた。ところがここへ来てお梅婆さんのお節介がまた始まった。忠久は疎ましく思いつつも、のらりくらりと躲すしかないと思っている。別に、嫁を貰わないと決めているわけではなかった。過去にはいたこともある。が、病で亡くしてしまった。もう三年になる。今でも亡き妻への想いが残っているのは確かだったが、そのために後添えを貰わないのではなかった。何となく気が引ける。貧乏さ加減が申し訳ない。自分ひとりなら何とかやっつけていけるが、もうひとり増えるとなると、困窮が目に見えている。そうなったらなつたで、お梅婆さんや村の人たちの援助でやっつけていけるかもしれないが、それを前提に考えたくはなかった。そんなことよりも、忠久が本当に気にしていたのは、自分が変わり者だということだった。そんな風評があるのは知っていたし、自覚もある。こんな変わり者のところへ来てくれる嫁などいない、と自虐的に半ば諦めていた。その所以は、何不自由ない武士の身分を捨てて百姓になったことだった。生家は重臣の家柄で、長年にわたって国の政に携わってきた。忠久はその家の三男坊だった。十六での初陣以来、敵を斬って手柄を立ててきた。それは武士にとって当たり前のことだと割り切ってきた。後ろ暗い罪悪感は大かにかあったが、詮方ないこととして考えないようにしてきた。三年前の戦でその考えは変わった。それまで斬る相手は敵兵である武士に限られていたが、その戦では主命とはいえ、女子供を斬った。武器も持たずに命からがら逃げ惑う弱者を容赦なく斬った。亡くしたばかりの妻の顔が浮かび、大かにかあった後ろ暗い罪悪感が厳然と姿を現し、苛まれた忠久は自分のやっていることの一切が分からなくなってしまった。分からないまま武士を棄て、村へとやってきた、父や兄たちの『臆病者』の謗りを背に。

「どうだ、旨いか？」とお梅婆さんがくうに訊く。

「びゃあ」

餌をむさぼり食っていたくうが、嬉しそうな顔をお梅婆さんに向ける。

「旨いと云ってるようだね。くうは賢いねえ」

旨いと云ってるかどうかはともかく、忠久もそう思っている。びゃあと鳴いているだけだが、人の言葉を理解したかのようにくうは振る舞う。じっとしていろと云えばしているし、遊んでこいと云えばそうする。戸口にやってきた雀を狙っていたときも、可哀相だからやめろと云ったら、渋々といった感じでくうは忠久を見上げ、家の中へ入った。欲目かもしれないが、くうは普通の猫とは違っているようだ。啼き声が不気味なのも普通とは違っている。夜中に鳴かれると魔物に出くわしたみたいで、ぞっとさせられる。

「見た目は可愛らしいのに、この声はなんとかならないのかねえ」

お梅婆さんもその声の不気味さを残念がっていた。

「喉の怪我さえ治れば元に戻るんだろが……」

「治ってもこのままですよ。怪我をする前もこんな声でした」

「怪我をする前？」

「前にも来たことがあるんですよ。桶に乗って川を流れてきたんです」

「棄てられたのかい？」

「そうですね。子供たちが面白半分にやったのかもしれませんが、酷いことをするものです」

お梅婆さんが顔をしかめる。近所の子供たちを疑っているのだろうか。

酷いことをすると云ったが、忠久にも覚えがあった。猫ではなかったが、子供の時分、兄たちと蛇や蛙などをいたぶって殺したことがある。面白半分だったが、今思うと残忍で愚かだった。

「川を流れてきたってことは、城下で棄てられたのかねえ？」

「おそらく。毛並みもいいし、人を恐れないようですから、飼い猫かもしれませんね」

「その家の子が棄てたのかねえ。悪さでもしたんだろうか」

「引っ掻いたりしたのかもかもしれませんね。こう見えて意外とくうは気が強いんですよ。お梅さんにも見せてやりたかったな、四匹の野犬に囲まれても怯まないで、逆にやっつけちゃったんですよ」

「ほう。強いんだねえ、くうは。くうを怒らせないように気をつけないといけないねえ」

驚いていたお梅婆さんの顔が微笑む。忠久もつられて笑った。

「それにしても、どうして戻ってきたんだろうね、くうは？ 前はすぐいなくなったんだろ？」

「ええ。桶から出してやるとすぐさま。それから川上の方へ駆けていきました。城下まで行ったのかどうかは分かりませんが」

「そして舞い戻ってきた……。何かわけがあるんだろうかねえ」

「さあ……。猫のことですから気まぐれなだけじゃないでしょうか」

「気まぐれでこんなところまで来るかねえ。猫の脚では難儀なはずだよ」

「きっと、一旦は飼い主の元へ帰ったものの、また捕まりそうになり、逃げ出してきたのでしよう。行く当てがなかったくうは、ここを思い出してやってきた……」

「なるほど。そうかもしれないねえ。口が利けたらいいんだけど。賢いくうのことだ、そのうち人の言葉を話すかもしれないよ」

いたずらっぽい笑みでお梅婆さんが云う。

忠久は笑えなかった。冗談のつもりにしても、猫が話をすると考えるだに空恐ろしかったし、ましてやあの不気味な声だと想像すると背筋が寒くなりそうだった。

自分のことが話題になっているのを知ってか知らずか、くうは腹を満たすと、竈の隅で丸くなった。そこにくうの寝床がある。くうと一緒に流れてきた桶に藁を敷いただけだが、くうはたいそう気に入ったようで、声がしないときはたいていそこで寝ている。

おおかたの猫は飼い主が何をしようとか関心を示さず、自分のやりたいように行動する。日がな一日、自分の縄張りをうろうろしている。ときには好奇心を抑えられないのか、縄張りの外までふらりと出かけることがある。何処で何をしているのか、飼い主にはその実態をなかなか窺い知れないが、くうの場合、忠久には簡単に分かった。常についてくるのである。忠久の行くところをくうは、畑であろうと村の誰かの家であろうと、何処にでもついてきた。恩義を感じて忠誠心を示しているのか、ただたんに寂しいだけなのかは分かりかねたが、とにかく、くうは忠久の後ろを、びゃあ、と鳴きながらついてくる。その様がまるで犬のようで、忠久は可笑しく思った。

畑に出ると、忠久が鍬を振るう傍らで虫を追った。じゃれるかのように蝶や飛蝗を追いかけ回すも、跳ね上がったその前足は虚しく空を切るばかりだった。蛙やトカゲの類いは苦手なようだ。近づこうとさえしない。そのくせ蛇には興味を示した。その動きに本能を刺激されたのか、蛇の後ろを追いかけては、前足でちょっと突つき、弄ぶ。だが、ひとたび蛇が反転すると驚いたように飛び跳ね、そして恥ずかしそうに、今のは怖かったからじゃないからね、と言いつの顔で忠久の足にまとわりつく。鍬が危ないからと叱られ、拗ねたようにしてまた虫を追うに行く。しばらくして虫追いに飽きると、再び忠久の元に戻ってくる。離れて、びゃあ、と鳴く。それは、お腹が減ったから早く帰ろうよ、と云っているようだった。

新しく村の住人ならぬ住猫となったくうに、近在の子供たちは興味津々だった。喉の傷痕が痛々しく、その鳴き声も気味悪くはあったが、横腹のくの字の文様を面白がった。

「これは“く”という字だ」

字を読める子が得意げに話す。読めない子たちが、へえ、と感嘆の声を上げる。

「だからくうって名前なんでしょ？」

そうだ、と忠久が答えると、子供たちは素直な目で頷いた。次々に子供たちの手が伸び、くうの頭を撫でる。くうは迷惑そうな顔をし、逃げ出そうとした。

字を読める子がくうを捕まえ、立たせるようにして手に持った。

「こうすると“へ”という字になるんだ」

“へ”と聞いて屁を連想し、皆が声を立てて笑った。忠久も、なるほどと思い、苦笑いした。

屁と云われたことに腹を立てたのか、くうは激しく身をよじり、捕まれていた手から逃れると、一目散に家の裏山へ駆けた。子供たちは歓声を上げてくうを追ったが、藪に隠れたくうを見つけることはできなかった。

このとき以来、くうは村の子供を見かけると避けるようになった。人を恐れているわけではないので、へ、と呼ばれてからかわれるのが嫌なのだろう、と忠久は思った。

「やはりお前には人の言葉が分かるのか？」

そんな馬鹿なことがあるはずもないと思いつつも、忠久は桶の中で寝そべっているくうに訊いてみた。忠久の問いに、くうはしゃがれた低い声で、びゃあ、と応えるだけだった。

その夜、忠久は妙な夢を見た。

歳の頃は四十半ばくらいの、いかにも良家の出と思われる品のいい女性が枕元に立ち、忠久の年齢や出自、ひとりである理由などを訊いた。その女性に見覚えはなかったが、何となく親しい存在に思えた。忠久の身上を一通り聞き終わると、女性は微笑み、姿を妙齢の美しい娘に変えた。

。

一瞬にして心を奪われ、夢の中だというのに忠久は鼓動の高鳴りを感じた。その娘にも見覚えはなく、今度は忠久が名前を訊こうとした。が、夢の常で、その娘は答えないまま笑みを残し、朝霧のように消えてしまった。

隣のお梅婆さんも忠久と同じくひとりで暮らしている。戦で夫と息子を亡くし、しばらくは忠久の屋敷で暮らしていたこともあった。忠久が子供の頃で、この村に舞い戻って二十年くらいが経つ。このお梅婆さんが何かと世話を焼いてくれるので、武家育ちの忠久も今では村の一員になれたのではないかと考えている。相手方が必要以上に萎縮して、身分的な乖離を感じることもたまにあるが、それでもそんなものはそのうちなくなるだろうと楽観している。ただ、漠然とした違和感を抱いていた。武士から百姓への転身は正解だったのだろうか。この村での暮らしに不満はないが、何かが違う気がしてならない。

農閑期ということもあり、忠久は昼過ぎにくうを伴い、二日に一度は隣家を訪れる。用はいろいろあった。野菜をもらったり、お返しに家の修理をしたり。くうの楽しみは魚だった。お梅婆さんの知り合いが浜町からときどき干物を届けてくれることがあり、その日はくうにとってご馳走となった。この村に来た当時は百姓仕事のほとんどを教えてもらった。慣れない仕事に戸惑うことが多く、お梅婆さんがいなければ生きていけなかっただろう、と忠久は思っている。忠久にとってお梅婆さんは先生であり、友人であり、母だった。

訪問の主な目的は、お梅婆さんの様子を見ることだった。二日も顔を合わさないと心配になる。まだまだくたばりはしないとお梅婆さんは云うが、なにぶん歳も歳だし、長生きをしてもらわねばならない。

「腰の具合はどうか？」

「ああ、だいぶいいよ。すまないね」

日頃の無理がたたったようで、お梅婆さんは腰を悪くしていた。俯せに寝ているお梅婆さんの腰を、少し力を加えて揉む。

「痛くはないですか？ 強すぎますか？」

「大丈夫だよ。いい気持ちだ。忠さんは器用だねえ。何でも上手にこなす」

「見よう見まねですよ。ほら、お梅さんが我が家にいた頃、母にやってあげてたでしょう。大人って不思議なことをするものだ」と心に残っていたんです」

「あの頃は末松家のお陰で命をつなぐことができたよ。突然ひとりぼっちになってしまったからね。戦なんてなくなってしまうえばいいのに。三年前の戦では女子供までが巻き添えになってしまったし……酷い話だよ。それで嫌気がさして、忠さんはここへやってきたんだったねえ」

穏やかだったお梅婆さんの横顔がかき曇る。

「ええ」と、忠久は短く答えた。ふっと惨殺の場面が脳裏を過ぎる。炎に包まれた城から逃げ惑う女子供――刀を振りかざして追いかける武者たち――

「また戦が始まるのかい？ 殿様が亡くなって、跡目争いが起きているそうじゃないか。遺されたふたりの幼子の、どちらを世継ぎにしたものか、家臣の間で意見が分かれてるって話だけど……」

「あれ、ご存じなかったんですか？ その話は決着したらしいですよ」

そういう忠久自身、三日前に長老の庄右衛門から聞いたばかりだった。政の話が下々に届くのは遅い。しかも大まかな話しか伝わらない。

「ほう、そうかい。で、どうなったんだい？」

「長子である兄君が継がれることになったんですよ。十日程前、兄君を支持する竹宮様が反対派の急先鋒だった黒坂様を急襲なさったんです。それで黒坂家は滅亡。他の反対派は火の粉がかかるのを恐れて口をつぐんでしまったとか」

「意見が違うからといって襲撃するとはずいぶん乱暴だねえ。以前から確執があったらしいが、酷いことをするもんだ。跡取りの兄者がいるのに弟を担ぎ出す方もどうかと思うが……」

「それにはわけがあったようです」

「どんな？」

「兄君は病弱だったとか。そういう君主では乱世を乗り越えるのは難しいと黒坂様は訴えられたようです。しかし、竹宮様は、黒坂様は私怨を果たすために弟君を盾にされたと思われたようです。国を分けているときではないのに、私事しか頭のない黒坂様に憤りを覚えられ、討たれた……。黒坂様が先に仕掛けたという話もありますが」

「それにしても家を滅ぼすことはないだろう。乱暴すぎるよ」

怒りをにじませていたお梅婆さんの横顔が向きを変え、ぐるりと辺りを見渡す。

「くうの姿が見えないねえ」

「喉の傷が癒えたからでしょうか、先ほどからぷいと何処かへ行っていました」

「珍しいこともあるもんだねえ。普通の猫なら珍しくもないが……」

忠久は昼前に起こった出来事を話したものかどうか迷っていた。いたずらにお梅婆さんを怖がらせたくはない。そんな忠久の躊躇をお梅婆さんは察した。

「何かあったのかい？」

聞かせたくはなかったが、この際、お梅婆さんには正直に話しておいた方がいいだろう。

「ええ、まあ。朝から畑で草取りをしておりましたところ、何処ぞの和尚さんが小僧さんを伴って歩いてこられたのです。もちろんそのときは、いつものようにくうも畑におりました。和尚さんを見たくうは恐れるかのように、すうっとわたしの傍を離れて、畑の脇の草むらに消えてしまったのです。そして近づいてきた和尚さんがこう云ったのです、いまの猫はあなたが飼っておられるのか、と。そうですと答えると、和尚さんは険しい顔をして、あやかしの気配が漂っている、気をつけられよ、とおっしゃったのです」

「あやかし？ くうはあやかしなのかい？」

「どうなんでしょう、わたしにはとてもそうは思えませんが。でも、思い当たる節がないわけでもありません」

「どんな？」

「ほら、犬に囲まれた話をしたでしょう。あのときのくうは鬼気が迫っていて、まさにあやかしのようでした」

「窮鼠猫を噛むって諺があるじゃないか。きっとそれだよ。窮猫犬を噛むってことだよ」

お梅婆さんが自分の冗談に満足そうな笑い声をたてる。

「そうかもしれませんが……」

「わしは信じないよ。くうはくうじゃないか。確かに啼き声は気持ちが悪いけど、賢いし可愛らしい猫だよ。わしはくうが好きだ。たとえくうがあやかしだったとしても、それがどうしたっていうんだい？ 悪いあやかしだと決まったわけじゃないだろう？ 良いあやかしだっているはずだよ。そう思わないかい、忠さんは？」

「はあ……」

良いあやかしと聞いて突拍子もない考えが忠久の頭に浮かんだ。

猫の恩返し。

今朝方見た夢、あれは正夢ではないだろうか。くうがあの娘に姿を変え、帰ってくるのではないだろうか。そして妻に――

「何を考えてるんだい？」と、お梅婆さんが訊く。

ぼうっとしていた忠久は、休めてしまった手を再び動かした。

「何でもありません」と、声がうわずる。

自分の妄想ぶりが恥ずかしく、上気しているのが自分でも分かった。

「何でもないことはないだろう。妙なことを考えていたね？」

ずばり当てられ、忠久はますます恥ずかしくなった。

「夢ですよ、今朝方見た夢」

忠久はぶっきらぼうに云った。これ以上詮索されたくないとの思いを言外に込めたつもりだったが、やはりお梅婆さんは容赦してくれなかった。

「どんな夢だったんだい？」と、興味津々に訊く。言い渋ったために、関心が高まったようだ。

「若い娘の夢です」

「ふうん。若い娘ねえ。綺麗だったんだろ？」

「ええ。綺麗な娘でした」

「その娘と忠さんは夢の中で……」と、お梅婆さんがからかって云う。

「何もありませんでしたよ、お梅さんが考えているようなことは」

忠久はむっとなったが、あえて口にはしなかった。お梅婆さんに悪気がないのは知っている。

「それはあれだね、忠さんの願望が夢に出たんだね。こんな綺麗な娘を嫁に欲しいと願っているんだよ、忠さんは。その娘のことが気に入ったんだろ？」

「そりゃまあ……」

「そんな娘が現れてくれたらいいんだけどねえ」

忠久もそう思っている。夢でなく現実になってくれたらどんなにいいだろう。

「さっき、くうがあやかしだったらって話をしたけど、ひょっとしたらくうがその娘に化けて出てくるのかもしれないね。夢のお告げかもしれないよ」

お梅婆さんの口調は冗談とも本気とも区別がつかなかった。お梅婆さんが同じことを考えていたことに驚いたものの、忠久は平静を装った。

「まさか」と笑い飛ばす。

「そうだねえ。そんなことあるわけないねえ」

お梅婆さんも忠久に腰を揉まれながら笑った。しかし、その娘は現実に姿を現した。

翌朝、帰ってこないくうを寂しく待ちわびながら忠久が畑に出ていると、お梅婆さんが血相を変えてすっ飛んできた。昨日まで腰を痛めていたとは思えない走りっぷりだった。

「どうしたんです？ そんなに慌てて」

「これが慌てずにいられるかい」

お梅婆さんは息を切らしていた。膝頭に手を当て、ぜいぜい云っている。

「落ち着いてください。何があったんです？」

「出たんだよ」

「出たって……何が出たんです？」

「忠さんが云っていた夢の娘だよ。忠さんの家の戸口に若い娘が立っていたんだよ」

「嘘でしょう。またわたしをからかっているんですね」

「嘘なもんかね。そんなことのために、こんなに必死になって走ったりしないよ」

それもそうか、と忠久は思った。若い娘が家にやってきたのは本当だろう。だが、それが夢に見た娘のはずがない。お梅婆さんは怖がりすぎだ。

「とにかく帰ってみましょう、わたしを待っているのでしょうか」

急ぎ足で家へ向かう忠久の後ろをお梅婆さんが遅れてついてくる。それは疲れからというよりも、不意に姿を現した娘を恐れているようだった。たとえくうがあやかしであってもくうはくうじゃないかと強気で云っていたのに、いざくうが化けたと思っている娘をその目にするとお梅婆さんでも怖いのだろう。

忠久にはまだ余裕があった。若い娘が訪ねてくることなどこれまでなかったが、実家の末松家から使いが来たのかもしれない、と忠久は思った。ほとんど交流はなかったものの、完全に縁を絶ったわけではない。政局が乱れているから、いい加減目を覚まして帰ってこいともいいたいのだろう。黒坂家と竹宮家の争いで、末松家は仲裁役を務めていたと長老の庄右衛門から聞いた。黒坂家を滅ぼした竹宮家の刃が末松家に向けられるかもしれず、少しでも人手が欲しくて使いをよこした、おおかた、そんなところだろう。何を今さら――。

しかし、家に近づくにつれ、忠久の余裕は薄れた。ふたりの女性が目に入り、ひとりはお女だった。お供らしく、手に小さな荷物を持っている。もうひとりがお梅婆さんを驚かせた若い女性だった。末松家からの使いではなかった。その顔をはっきりと認めた忠久は息を飲んだ。

老女は夢で見た女性ではないが、若い娘は確かに夢で見た娘だ――。冷たいものが忠久の背中をぞぞっと走る。

お梅さんが云うようにあやかしののだろうか。人ではないからあれほどに美しいのだろうか。近づく忠久に、ふたりの女性がお辞儀をする。

「あなたが末松忠久様でしょうか？」と、若い女性が訊く。

「そうですが……」

忠久は上の空だった。くうが化けた娘かもしれないとの馬鹿な考えはあっという間に霧散していた。夢で見たときと同じように娘に心を奪われ、胸が高鳴っている。くうだとしたら忠久を確認するはずがない。そしてこの娘は忠久がただの百姓でないことを知っている。誰かに末松家の末弟と聞いているかもしれない。己の身なりを鑑み、忠久は決まりが悪かった。

「実は猫を探してまして……あっ、わたくしは桂、こちらは陸と申します」

紹介されたお陸共々、お桂が頭を下げる。忠久も頭を下げた。

「猫を。それはどんな？」と、忠久は空惚けて訊いた。

おそらくくうのことだろう。ということはこの娘が飼い主で、連れ戻しに来たのだろう。ふっと忠久は胸中に寂しいものが去来するのを感じた。

「ええ。ぶち猫です。横腹にくの字のような模様があるのですが。川下の村をあちこちを探していて、こちらにそんな猫がいると聞きました」

間違いありませんよね、とお桂が微笑みかける。

「確かにお探しの猫は我が家にいました。が……いまはいません」

「いない？」

とたんにお桂の顔から微笑みが消えた。

「昼前からずっと。まあ、腹を空かして夕方には戻ってくるでしょうが」

「夕方……ですか」

いくぶんほっとした様子を見せたものの、お桂は落胆の色を隠せない。

遅れていたお梅婆さんがやっと着いた。ひと息つくと恐る恐る忠久の背中に隠れ、そっと顔を覗かせてふたりの訪問者を見やる。

「平気かい？」と、小声で忠久に訊く。

「大丈夫ですよ。この人たちはくうを探しに来たんです」

「それじゃ……」

「ええ、あやかしじゃありません。人です。普通の女の人です」

安堵の吐息が聞こえる程に、お梅婆さんの顔が緩む。そして恥ずかしそうに、ふたり会釈した。

忠久がそれぞれを紹介し終わると、にわかに元気を取り戻したお梅婆さんが、ふたりを忠久の家へ手招きした。粗末な家にふたりの上品な着物はそぐわなかった。

「突っ立っていても何だから、中へお入りなさいな。汚いところですけど」と、まるで自分の家かのように云う。

「汚いは余計でしょう」

わざと大袈裟に怒ってみせる忠久に、お梅婆さんもふたりの訪問者も笑顔を浮かべる。

中に入ると、女たちは昔からの知り合いだったかのようにお喋りを始めた。

「くうをお探しということだが、何処から来なすった？」

「城下です」と、お桂が答える。

「城下から！ そりゃまあ遠いところから。さぞお疲れじゃろう」

「それほどでも。休み休み来ましたから」

「よほどくうを可愛がっておいでだったようだね。ああ、わしらはくうと呼んでおったが、本当は何という名前なんじゃ？」

今さらながらにお梅婆さんは訊いた。

ふたりの訪問者が顔を見合わせる。

「名前は特には……。飼っていたわけではありませんので」

「何だ、違ったのかい。てっきり飼い猫かと思ってたよ」

「城下でたまに見かけて、可愛いから餌をあげていただけです」

「それなのにわざわざ探し回ったというのかい？」と、お梅婆さんが訝しげに訊く。

忠久も妙だと思った。たまに餌をあげていただけの近所の野良猫を探して、こんなところまで来るだろうか。女の足だと半日はかかる。そこまでしてくる理由とは――

またもふたりの訪問者は顔を見合わせた。話していいものかどうか迷っている。が、意を決したように、お桂が毅然とした顔を見せた。

「おかしい話だと思われるかもしれませんが、夢枕にくの字の猫が現れ、餌をあげていたあの猫だと思っていると、母に姿を変えたのです。そしてわたしに優しく微笑みかけ、吉助を頼む、と云って消えてしまいました。吉助とはわたしの弟です。七つとまだ幼く、母は気にかけておりました」

夢に出てきた四十半ばの、品のいい女性はお桂の母親ではないだろうか、と忠久は思った。

「ということは、お母上はもう……」

お梅婆さんが心苦しそうに訊く。

「ええ。もともと身体が弱く、病に伏せておりましたが、あることが原因で急に容態を悪化させ、亡くなりました」

「あることとは？ 訊いてもいいかい？」

立ち入りすぎだろうと忠久は思ったが、お梅婆さんは好奇心を抑えられなかったようだ。

「母がここへ連れてきてくれたと思っていますから、お話ししましょう。実は……母は黒坂家の出でして、黒坂家と竹宮家の諍いはお聞き及びでしょうか？」

「ああ、最近知ったよ。何でも黒坂家は討ち滅ぼされてしまったんだってね」

「母は生家の末路を悲しみ、生きる気力を失ったのです」

「それじゃ、あなたは樽満の……」

忠久は確認するように訊いた。城下でも有数の豪商である樽満のお内儀が、黒坂家にゆかりがあると聞いたことがある。

「娘です」と、お桂が云う。

「あの樽満かい？」

驚きの目で念を押すお梅婆さんに、お桂が頷く。

「忠さん、樽満だとよ。樽満の娘さんだとよ。どうりで……」

お梅婆さんがお桂の高価そうな小袖をしげしげと見る。

「わたしが先にそう云ったじゃありませんか」

お梅婆さんの動転ぶりが可笑しく、忠久は思わず笑った。

「ああ、そうだったね」と、お梅婆さんが恥ずかしそうに云う。

ふたりの訪問者も笑顔だったが、忠久が真顔になると、何事かと訝った。

「猫が夢の中でお母上に姿を変え、そしてその猫を探しておられるということは、くうがお母上の生まれ変わりか何かとお考えなのですか？」

「おかしいですよ。でも、そうとしか思えないのです。母が亡くなったとき、ひょっこり猫が現れました。くの字の猫、あなた方がくうと呼んでおられる猫です。姿は同じでしたが、声がそれまでとは違っていました。普通の猫のかわいらしい鳴き声だったのに、恨み言を云うかのような、気味の悪い声になっていたのです。それは母の声を聞いているようでした。母は病のせいで声が低くしゃがんでいたのです。わたしは、母が猫に憑いたのだと思っています」

お梅婆さんが、ぶるっと身を震わせる。

「憑いているかどうかはともかく、あの鳴き声は恨み言を云っているように聞こえるねえ」

「恨み言というのは、生家を滅ぼした竹宮様への、ということでしょうか？」

夢の中で見た女は気品に溢れていた。あの女が恨みを抱いていたとは――。忠久は信じられない思いで訊いた。

「そうです。竹宮様と父を恨みながら母は死んでいったのです」

「お父上を？ 竹宮様は分かるが……」

「母が黒坂家の出であるのを知っていながら、父は竹宮様の側に立ったのです。竹宮様の鼻窟を受けて樽満は今日の地位を築き上げました。それは事実です。ですが、だからといって母の生家と対立する竹宮様に軍資金まで渡すことはないでしょう。父が竹宮様についたと知った黒坂家は焦るあまり、竹宮家に夜襲を仕掛けようとして逆に機先を制されたとか。真相のほどは分かりませんが、せめて父が中立でいてくれたら母はまだ命を保っていたかもしれませぬ」と涙をこらえ、必死の思いで悔しさを滲ませながらお桂が云う。お桂もまた父を恨んでいるようだ。

悲壮な打ち明け話に場が静まりかえる。その沈黙を破ったのはお梅婆さんだった。

「やはりくうはあやかしだったのかねえ」

「やはり、とおっしゃいますと？」と、お桂が訊く。

「四匹の犬を打ち負かしたらしいし、忠さんが同じような夢を見たって云うし……。いえね、くうが夢に出てきて、若い娘に化けたって……。そうだったね、忠さん」

くうが最初に化けたのは母親らしい人だったが、今さら訂正することでもないだろう。

「まあそうです」と、忠久は流した。

「たいそう綺麗な娘さんだと云ってたね」

嬉しそうに云うお梅婆さんに、忠久は頷くしかない。

「その若い娘さんが忠さんのお嫁さんになってくれたらって話をしていたんですよ」

意味ありげに、お梅婆さんがお桂に目を向ける。

余計なことを、と忠久は思った。夢に出てきた娘は目の前にいるお桂だった。忠久はお桂を意識せざるを得なかった。目と目が合い、お桂が顔を赤らめ、目を伏せる。

「それにしても、くうは遅いねえ」と誰に云うでもなく、お梅婆さんがつぶやく。したり顔のお梅婆さんの視線は戸口にあった。そこからひょっこりくうが姿を現さないかと願っているかのよう。皆の視線も集まる。戸口から差し込んでくる陽はすでに紅かった。

「そろそろお暇した方が……」

それまでずっと控えめに押し黙っていたお陸が口を開いた。

「そうですね……」と、お桂が未練がましく云う。

「城下に着く頃には夜中になってしまいますよ。わしのところに泊まったらどうです？」

「それにはおよびません。浜屋敷へ行きますから」

「浜屋敷？」と、お梅婆さんが素っ頓狂な声を上げる。

「浜町にも屋敷がありまして……」

鼻にかけていると思われるのを恐れているのか、お桂は恥じ入る様子を見せた。

樽満は、穀物はもちろん、木材なども扱っているし、財の礎となった海産物はほぼ独占している。浜町ならここから一刻もかからない。特段の所用がなくて浜町へ行ったことのない忠久は、賑やかな港町の一角に陣取る大きな屋敷が想像させられた。

もう少し待っていればと云うお梅婆さんを振り切り、お桂たちは忠久の家を辞去しようとした。

「忠さん、送ってあげなさいな。物盗りが出ないとも限らないからね」と、お梅婆さんがにやりと笑う。もてあそばれている気がして癪だったが、物取りは出なくとも、野犬はいるかもしれない。忠久が先を歩き出すと、遠慮していたお桂たちも申し訳なさそうにあとをついてきた。

紅く染まる街道に人の姿はない。遠くで烏が鳴いているだけで、三人に会話はなかった。秋も近いというのに、忠久は息苦しいほどの熱気を感じていた。それは残照のせいばかりではなかったようだ。次第に日は暗くなり、幸い物盗りにも野犬にも出会うことなく浜町に着いた。想像と違って町は賑わっていなかった。昼間なら活気に溢れているのだろうが、さすがに日が暮れると人は多くない。それでも町人や人足たちが飲み屋にたむろしていた。

樽満の浜屋敷は思い描いていたとおりに豪壮だった。遠目でもそれと分かり、ほかの家々を圧倒している。忠久の知っている城下の屋敷と比べても遜色がなかった。近づくと、ふたりの人足が立っていた。主従関係にあるようで、偉そうな方が忠久を見やったものの、その百姓風情に無視しても構わないと決めつけたようだ。視線をすぐにお桂に移した。

「本当にお桂様だとは思いませんでしたよ。こんなところまで来られるはずがありませんから。ですが、こいつが見たって云うもんですから、こうやって確かめに出向いたってわけです」

偉そうな男がもうひとりに顎をしゃくって云う。

「それはご苦労様」と、取って付けたようにお桂が云う。

「どういう了見でこちらへ？ 本屋敷からは何も伺ってありませんが」

「与三郎には関係のないことです。それとも、わたしもいちいち人足頭であるあなたの許可を得ないといけないのですか？」

咎めるようにお桂が云うと、与三郎は身を小さくした。

「いえいえ、滅相ありません。もちろん、いついらしても結構です。ですが……」

「なんですか？」

「まさか例の猫を探してこちらへ来られたのではないでしょうね？」

「そうよ。それがどうかしたの？」

「あんな化け猫に関わるのはおよしになってください。本屋敷の使用人がふたりも祟られているんですよ。ひとりには猫を川に流したため、もうひとりには鎌で斬りかかったため。息こそしているものの、今でもふたりは寝たきりで、ぴくりとも動かないと聞いています。大旦那様も猫を恐れておられるようですし、お桂様の身に何かあったらどうするんです？」

「わたしは大丈夫です。わたしには何も起こりません」

「そんなの分からないじゃないですか。相手は化け猫ですよ。どうしてそう云えるんです？」

「母がわたしに危害を加えるはずがありませんから」

「母？ 先日お亡くなりになったはずですが……」

意味が分からず不審がる与三郎に、説明するのは面倒だとばかりにお桂は話を変えた。

「そんなことより与三郎……」

「何でしょう？」

「わたしを中へ入れてくれるの？ 　くれないの？」

「ああ、これは失礼しました」

与三郎たちが道を空ける。お桂は振り返り、忠久に頭を下げた。

「ありがとうございました。明日も伺いますのでよろしくお願いします。明日こそくうに会えますよね？」

「おそらく」

明日の再会を約束し、忠久は踵を返した。背中に、あれは誰です？ と、非難するように問い詰める与三郎の声が聞こえた。関わり合いになってはいけないと云っているようだ。どうやら化け猫と同じ扱いらしい、と忠久は思った。

月明かりを頼りにひとりの道を歩き、村に着く。お梅婆さんはもう寝ただろうと思っていたが、心配してくれていたのか、忠久の家の前で帰りを待っていた。微笑みかけて軽口のひとつでも叩こうかとお梅婆さんを見やると、とてもそんな雰囲気ではなかった。恐ろしいものでも見たかのように顔がこわばっている。

「どうかしたんですか？」と忠久が訊くと、お梅婆さんは首を振った。

「わしはどうもせんが……くうが帰ってきたんじゃ」

やっと帰ってきたか。これで明日、お桂はくうに会える。何かに怯えるようなお梅婆さんが気になっていたが、忠久はひと安心した。

「腹が減ったから帰ってきたのでしょうか。どれ、わたしも遅い飯にしますかな」

家の中に入ろうとする忠久を、お梅婆さんは押しとどめた。

「入らん方がいい」

「どうしてです？ わたしの家なのに」と、忠久は苦笑した。

「くうが変なんじゃ」

「変？」

「何かを噛み殺してきたようなんじゃ。口の周りが朱に染まっていた。あれは血じゃな。身体にもついてた。恐ろしい目をしてた。爛々と怪しく輝いて、近づくな、と云っているようだった。わしは生きた心地がしなかった。くうに噛み殺されてしまうかもしれない、と思ったんじゃ。だが、くうはいつもの桶のところへ疲れた足取りで行った。ひと仕事終えたから寝るといった具合にね。今はおとなしく眠っているようだが、起きたら何をするか分かったもんじゃないよ」

くうは普通の猫とは違う。あやかしかもしれず、そんな話を聞いたばかりだった。樽満の使用人がふたり崇られているらしい。くうの首の傷は鎌によるものに違いない。ふたりはおおかた、大旦那の命令でやっただけなのだろうが、哀れなことだ。それにしても——くうはくうだ、と云っていたお梅婆さんの変わりようが忠久は可笑しかった。

「きっとまた野犬とでもやり合ったのでしょうか。それだけのことですよ」

忠久は気休めを云った。これ以上、お梅婆さんを怖がらせたくなかった。

「そうかねえ。とてもそうは見えなかったが……」

「飯の準備をすればのっそり起き上がって、いつもの声で、早くくれと鳴きますよ」

忠久は戸口をくぐった。竈の隅のくうが寝ている辺りに目をやったが、暗くて何も見えない。

明かりを灯す。くうは桶の中で少しも身じろぎせずに、泥のように眠っていた。近づいてその口元を見やると、お梅婆さんの云うように、確かに血らしきものがべっとりとついていて、身体にもついている。やはり何かを血が出るほどに噛んだのは間違いないようだ。殺したかどうかは分からないが。

板敷きに上がり、火をつけて囲炉裏の鍋を温める。と、戸口からお梅婆さんが覗いていた。声には出さずに、大丈夫かい？ と云っている。忠久は大きく頷いた。

「こっちへ来たらどうですか？」

呼びかけても首を振るばかりで、お梅婆さんは戸口を動かそうとしなかった。ちらりとくうに目をやり、いつでも逃げ出せるように用心している。

飯の匂いが立ち、腹がぐうと鳴る。これでくうも鼻をひくつかせて目を覚ますだろうと思ったが、くうは微動だにしなかった。わざと音を立てて飯をかき込んでも、死んでいるかのようにくうは目を覚まさない。

「起きないねえ」と、お梅婆さんが戸口から云う。

「よほど疲れているのでしょうか、このまま寝させてあげましょう」

「ずっと起きないことはないよねえ」と心配そうに云い、お梅婆さんは我が家へ帰って行った。

くうは何をやったのだろう。野犬を噛み殺しただけならいいが、どうも違う気がする。

翌朝、忠久は、びゃあ、という鳴き声で目を覚ました。くうが起きている。横になったまま目を開けると、目の前に血のついた口があった。今にも噛みつきそうで、驚いた忠久は跳ね起きた。なおもくうは、びゃあびゃあと鳴き、忠久の足にまとわりつく。

くうは腹が減っているだけのようだ。自分の狼狽ぶりに苦笑し、忠久はくうに餌をやった。がつがつと旨そうに餌を食うくうを見ていると、どこにでもいる腹を空かせた猫にしか見えず、夕べの疑念は薄らいだ。野犬かどうかは分からないが、気にするほどでもないだろう。

餌を食い終わったくうを抱きかかえ、甕の水で顔を洗ってやる。最初は水を嫌がっていたくうだったが、美人が台なしだぞと云うとおとなしくなった。くうは忠久にされるがままだった。だが、洗い終えて放してやると、やっと苦痛から開放されたとばかりに、戸口に向かった。

「遠くへ行くんじゃないぞ。あとでお桂さんが来るからな」

くうの動きがぴたりと止まった。確認するかのようには振り返る。

「樽満のお桂さんだ。お前は可愛がってもらったことがあるんだろう？」

びゃあとひと声鳴き、くうは戸口を出て行った。くうが何と云っているかは分からないが、忠久は察することはできた。くうは戸惑っていた、困ったなどでも云いたげに。

陽はまだ夏の名残があって暑い。朝の涼しいうちにと、忠久は鎌を持って畑へ向かった。

ふと、お梅婆さんの家から声がした。誰かと話している。相手が誰かはすぐに分かった。くうだ。赤子をあやすような物言いをする相手は他にいない。するとくうがお梅婆さんの家から出てきた。忠久が畑へ行くのを見越したかのように、道の前をさっさと歩き出す。

「お桂さんに会いたくないのか？」と呼びかけたものの、くうは無視するかのようには振り返りはしなかった。

遅れてお梅婆さんがうなだれて出てきた。

「洗ってあげたんだね。綺麗になったのはいいが……どうにもねえ。見た目は以前のくうなんだが、夕べの朱に染まった姿が浮かんでね、怖いんだよ」と、弱々しい声で云う。

「お梅さんらしくもない。くうはくうですよ。そう云ってたのは誰ですか？」

怯えるお梅婆さんに皮肉を云ったが、お梅婆さんは笑ってくれなかった。

「そう思っていたよ。だけど、どうにも怖くてねえ。そんなことはおくびにも出さなかったつもりだったんだけど、わしの怖じ気に気がついたんだろね、ぷいと出て行ってしまったよ。化け物を見る目をしていただけかねえ、くうに悪いことをしたよ」

「猫は気まぐれですから」

慰めになるかどうか分からなかったが、忠久は他に言葉を思いつかなかった。空々しいかとも思った。ふたりともくうがただの猫ではないと確信に近いものを抱いている。

「そうだねえ。わしの取り越し苦労ならいいんだが……」と云い、お梅婆さんは家の中へ隠れた。

道の向こうのくうが、忠久が来るのをじっとを待っていた。近づくとまた動き出す。一定の距離を保ったままで、それは畑に着いてからも同じだった。草取りをする忠久から離れてくうは、いるかいないか分からない虫を追いかけていた。そしてちらちらと忠久を見やる。目が合うと視線を逸らす。それは甘えたいのに我慢しているように見えた。何がそうさせるのか――夕べの血が関係している、と忠久は思った。

天気の話でもするかのように、さりげなく問いかける。

「そういえば、昨日は何処へ行ってたんだ？ ずいぶんと遅く帰ってきたが」

耳をぴくりと動かしたものの、くうは虫追いをやめなかった。

「飯も食わずに眠ったな。よほど疲れているようだったが」

それでもくうは、聞こえないふりをするかのように、見えない虫を追いかけた。

夕べ何があったんだろう？ 嫌な疑念が再び頭をよぎる。

人を殺めたのではないだろうか。お桂の母は夫である樽満の大胆那を恨んでいたらしいが――

風が出てきた。いつの間にか雲が垂れ込めている。雨が降り出しそうなほどに、辺りは急に暗くなった。そんな曇天の下、道の向こうに長老の庄右衛門の姿が見えた。険しい顔で近づいてくる。畑のくうを見やり、その顔は嫌悪に満ちてさらに険しさを増した。くうに気づかれないように、こっちへ来いと手招きする。

「お梅さんからこっちだと聞きましてね」

「はあ、何か？」

長老の表情から察するに、よくない話に違いなかった。

「城下で大変なことが起こったそうです」

「大変なこと……いったい何です？」

「城下へ使いに出していた使用人が先ほど帰ってきたのですが、夕べ、竹宮様の屋敷が襲われました。大勢が傷を負い、竹宮様と誰だか分からないもうひとりが殺されたとのことですよ」

突然の凄惨な話に忠久は驚愕した。朱に染まったくうの顔が思い浮かぶ。お桂の母は竹宮様も恨んでいたが、くうの仕業だとは思えなかった。くうがあやかしだとしても、猫一匹にできる所行とは思えない。竹宮様を恨んでいた者は他にもいるはずだ。

「城内の権力闘争はまだ続いてたんですね」

おおかた弟君を担ごうとする誰かの仕業だろうと思いたかったが、庄右衛門は首を横に振った

「権力闘争ではないようです」と、険しい顔のまま云う。

「違うのですか……」

だとしたら物盗りか。警固の厳しい竹宮家に盗みに入る輩がいるとも思えないが――。

「聞くところによると、くうは樽満にゆかりがあるとか。樽満のお内儀が可愛がっていたそうですね。亡くなられたお内儀は黒坂家の出。その黒坂家を滅ぼしたのは竹宮様。わたしが何を云いたいのかお分かりでしょう？」

忠久は頷いた。

「くうが黒坂家の恨みを晴らすためにやったと」

今度は庄右衛門が頷いた。

「それ以外に考えられません。くうは賢いですから、可愛がってくれたお内儀の恩に報いるためにやったのでしょう。お内儀の霊が猫に移って、というのは信じがたい話ですが」

お梅婆さんが話したのだろう。余計なことを一一。

「それで……わたしにどうしろと？ くうを差し出せとでもおっしゃるのですか？」

「いやいや、竹宮家では猫探しなどやっておりませんし、これからもやらないでしょう。当主を亡くしてそれどころではないでしょうから」

「それでは……」

困惑する忠久を、庄右衛門は毅然と見据えた。

「忠久様が何とかしてください。タベ、くうがやったことはいずれ村人も知るところとなるでしょう。そうになると気味悪がるでしょうし、手荒に出る者がいないとも限りません」

「つまり、始末しろと」

「そこまでは申しません。が、とにかく何とかしてください。では、お願いしましたよ」と云い、庄右衛門は来た道を引き返していった。

樽満の大旦那と同じように、何処かに捨てろというのだろうか。

くうが村の人に危害を加えるはずはないだろうに、何を恐れるというのか。

いや、庄右衛門が恐れているのは自分かもしれない、と忠久は思った。城内の権力争いが村にまで波及する懸念は多分にあった。忠久が末松家に繋がる身である以上、その可能性を完全に排除することはできない。平時ならともかく、内戦の様相が萌芽し始めた今、村にとって自分は厄介者でしかないのかもしれない。

忠久は悲しい目でくうを見た。くうはもう虫を追ってはいなかった。疲れたのか、地面にちょこんと伏している。その様はそこらにいるただの猫にしか見えない。村人もそう思ってくれたらいいのだが――。そうであれば、くうだけでもこの村にいられるだろう。

「帰るか？」

仕事が終わったわけではなかったが、そろそろ約束の頃合いだし、風が冷たかった。それに、くうにも元気がなかった。

くうがのそりと起き上がり、畑を横切って道に出た。来たときと同じように忠久の前を、一定の距離を保ったまま歩く。が、それは来たときよりも幾分近かった。

家に入ると、くうはすぐに桶の寝床で丸くなった。よほど疲れているのか、それとも疲れているふりをしてこれからやってくる誰かと顔を合わせたくないのか。その誰かが程なくやってきた。

「末松様、いらっしゃいますでしょうか？」と、戸口の向こうからお桂の声がする。すると、くうの耳が声のした方へ動いた。が、顔を上げることはしなかった。

「はい、お待ちしております」

忠久は自然と顔が綻んだ。板敷きから降りるときの身のこなしが軽やかで、少しばかり浮ついている自分が恥ずかしかった。

戸を開けると、後ろにお供のお陸を従えたお桂は、挨拶もそこそこに、その目に桶の中のくうを捉えた。

「ああ、どんなに探したことか」と云いながら、満面の笑みで駆け寄る。

やっと思いが叶ったと、手を伸ばして愛おしそうにくうを抱え上げたが、お桂の意に反し、くうは身をよじってお桂の手から逃れ、再び桶の中に入った。

「えっ？」

思いもしなかったくうの反応に、お桂は呆然となった。これはどういうことですか？ と、答えを求める目で忠久を見やる。何かの間違いであってほしいと、その手をもう一度くうに伸ばす。

「わたしのことを忘れてはいないよね？」

祈るようにつぶやくお桂を、忠久は見えていなかった。

「お桂さん、こっちへ」

お桂は戸惑いながらも忠久に付き従い、戸口の外に出た。

「お聞かせしておいた方がいい話があります。くうの前では話しにくいので」

忠久はお桂たちを、隣のお梅婆さんの家へ連れて行った。

お桂は今にも泣き出しそうだった。出てきたお梅婆さんが悲痛の顔をする。

「何かあったようだね。まあ、お入りなさいよ」

皆が板敷きに腰を下ろす。

何が語られるのかと不安そうな樽満のふたりに、忠久は笑みを作った。少しでも和ませようとしたのだが、笑みはぎこちなく、やがて消えた。くうの残酷な一面を話さなければならない。

忠久は小さな溜め息を吐き、おもむろに口を開いた。

「先ほどのくうの仕打ちをお桂さんは、くうが自分を忘れたからだと考えておられるようですが、それは違うと思いますよ」

「違う？ どう違うのですか？ くうはわたしの手から逃れました。触られるのを拒みました。忘れていと云うより、嫌っているようでした。もう一度やったら爪を立てられたかもしれません」

「くうは、お桂さんに合わせる顔がない、可愛がってもらってはいけないと思っているのではないのでしょうか。わたしの勝手な当て推量ですが」

お桂が怪訝な顔をする。

「どうしてそう思われるのですか？ 城下にいたとき、くうはわたしにも母にも懐いていました。わたしは、母がくうに乗り移ったと思っていますが、そうだったらなおのこと、くうは再会を喜んでくれるはずです。しかし、くうはわたしを避けました。どうしてです？ 合わせる顔がないとはどういう意味ですか？」

忠久は言葉を探した。が、婉曲的な表現が思い浮かばず、ずばり云うしかないと思った。

「覚悟して聞いてください。くうはタベ……人を殺しました」

この人は何を云ってるんだろうと、お桂が理解に苦しむ顔をする。その顔は根も葉もない嫌なことを聞かされたと嫌悪の顔になり、やがて薄笑いに変わった。

「くうがそんなことをするはずがありません。くうはおとなしい猫ですし、第一、猫に人が殺せるとお思いですか？ 殺せるわけがないでしょう」

お桂の口調は、担ごうたってそうはいきませんよ、とでも云いたげだった。

「お忘れですか？ お桂さん、くうはあやかしかもしれないですよ。最前あなたもそう云ったじゃないですか。普通の猫の尺度でくうを考えてはいけません」

「それはそうかもしれませんが……」

「それに、猫一匹の仕業ではありません。数十匹の猫を従えてくうがやったのです。誰が殺されたのか、それを聞けばお桂さんも納得なさると思いますよ」

「誰なんです？」と、お桂が怖ず怖ずと聞く。

「竹宮様です。竹宮様ともうひとり、家人なのか誰かは分かりませんが、屋敷にいるところを首を噛まれて殺されたそうです。竹宮様といえはお母上にとっては一族の仇ではありませんか。何よりの証拠に、先導の猫にはくの字の模様があったとか。そして、夕べ遅く帰ってきたくうの口の周りには血がついていました」

さっとお桂の血の気が引く。

「それでは母が人殺しを……」

「お母上ではありましようが、あやかしでもあります。以前のお母上とは違っているはずで。でなければ人殺しなどできようはずがありません。が、恨みに凝り固まった化け物でもないようです。人を殺したことで穢れてしまったと自分を恥じ、そんな自分に触れてはお桂さんまで穢れると考えているのではないのでしょうか」

「母は穢れてなどおりません。人を殺したとしても、それは立派に仇を討ただけではありませんか。一族の恨みを畜生に身を変えてまで果たしただけです」

必死に母を弁護するお桂の目からひとしずくの涙が流れる。

「そうだよ、忠さん。お母上は本懐を遂げなされたんだ。穢れてなどおりゃせんわ」と、お梅婆さんが口を出す。

多勢に無勢で、忠久は苦笑いした。

「わたしが云っているのは本人の気持ちです。仇を討ったことには大義がありますから後悔をなさってはいないでしょうが、人を殺したという事実は拭いきれずに重くのしかかるものです。わたしにも覚えがあります。一兵卒でしかないわたしは、主命で人を斬りました。女子供を殺めたこともあります。主命ですから、致し方なかったことですし、なんら恥ずべきことでもありません。兵士の中には斬った人数を誇らしげに語る者もおりました。高笑いで、己の武勇譚を酒の肴にする者もおりました。が、わたしはそういう気になりませんでした。虚しさばかりが込み上げ、心は空っぽになりました。そして……空っぽになった心を埋めたのは罪悪感です。わたしは自分が嫌で嫌でなりませんでした。侍が主命で人を斬ったのだから罪ではないと言い聞かせても、罪の意識はあとからあとから湧いてきて、自分が何者か分からなくなり……わたしは侍をやめたのです」

辺りは水を打ったように静かになった。お桂は指先で涙を拭い、お陸は身じろぎせず、事情を知っているお梅婆さんは、うんうんと頷いて目頭を押さえている。

自分の真情を吐露したことが面映ゆくもあり、忠久はこの場の湿っぽい雰囲気を変えたくなくなった。

「まあ、これでくうの敵討ちは終わったわけですから、そのうちくうも落ち着くでしょう。そしてまた馴れてくるのではないのでしょうか」と、努めて朗らかに云う。

「そうだねえ。憎き仇の竹宮様を討ったのだから、これでくうは元に戻るよ。お母上も成仏なさるだろう」

お梅婆さんも慰めの言葉をかけるが、お桂の顔は曇ったままだった。

「まだ何か？」と、忠久は訊いた。

心苦しそうに頷くお桂を見て、はたと思い当たった。

「樽満の旦那.....お父上ですか？」

お桂の母が夫を恨みに思っていたのは事実だろうが、まさか本当に殺意を抱くほどとは思ってもみなかった。相当に根が深いようだ。

「ええ」と、弱々しくお桂が答える。

お陸が、わたしが代わりに話しましょうか、と目配せしたが、お桂は首を横に振った。囁くような声で話を始めた。

「母は父のことも恨んでおりました。いまわの際に、赦さない、と怨嗟のこもった声で云ったのです。実際にその声を聞いたのは、枕元にいたわたしと父だけだったのですが、誰もが周知の事実として知っておりました。黒坂家が滅ぼされた直後から、病の床の母は父を罵り、恨み辛みを申しておりましたから、母が祟るのではないかと噂になっておりました。そして母の葬式の際、何処からかくの字の猫が紛れ込んできて、その姿を見た父は真っ青な顔で半狂乱になり、猫の処分を命じたのです。父もすぐにその猫が母の生まれ変わりか何かに思えたのでしょう。城下で最初にその猫を見つけたのは母でした。横腹の模様が“くろさか”のくの字に見えると云って、喜んで餌をあげたのです。父はもともと生き物が好きではありませんでしたので、わたしたち母娘が猫を可愛がるのを快く思っておりました。くの字の猫が黒坂家の使いに思えたのかもしれませんが。そんな猫が目の前に現れ、しかもその日は母の葬儀の日でしたから父は仰天してしまったのです。猫の処分に関わった使用人はふたりとも眠らされたままで、祟りはますます信憑性を帯びました。わたしはあの猫が母の生まれ変わりかもしれないと思うだけで会いたくなりました。それであちこち探していて、ようやくここにたどり着いたのです」

ひと呼吸置いて息を整え、お桂は話を続けた。

「母の父を許せない気持ちはわたしも同じです。わたしも父を憎く思っています。だってそうでしょう、父が竹宮様を援助しなかったなら、黒坂家は滅ぼされずにすんだのです。父が黒坂家を裏切ったせいで母は心を痛め、亡くなりました。父が母を殺したも同然です。母は生家を誇りに思っておりまして。樽満に嫁いだあとも頻りに訪ねておりましたし、わたしも子供の頃から何度も連れて行ってもらいました。温かくて、気が置けなくて、あれほど居心地のいい場所をわたしは他に知りません。その黒坂家は謂われなき凶刃に倒れ、もう存在しません。わたしは父が憎い。赦せません。父は欲に目がくらんだ極悪人です。きっと竹宮様に、今後も樽満の繁栄を約束するとか何とか云われたのでしょうか。父は竹宮様に魂を売ったのです。そんな父とはもう暮らしたくありません」

風の音がした。戸の隙間から土埃が舞い込む。

お梅婆さんが何かを閃いたかのように、ひょいと顔を上げた。

「父親を憎むお桂さんの気持ちは分かる。樽満の大旦那は商売のことを考えて竹宮様につかれた。竹宮様についての方が得策と判断されたのじゃろう。二者択一で黒坂家を見限られた。母親の生家を見捨てられたのだから、お桂さんが父親を赦せないと思うのは当然じゃ。だからといって……」

底意を覗き込むかのように、お梅婆さんがお桂をじろりと凝視する。

「竹宮様のように殺されても構わないとは思っておらんじゃろ？」と訊く。

一瞬の間があり、お桂は首を横に振った。それはためらいのためではなく、お梅婆さんの問いの真意を測りかねたからのようだった。

「まさかそんなこと……思っておりません。そんな恐ろしいことを思うはずがありません。憎くは思っておりますが、そこまでは……」

「それじゃよ」と、お梅婆さんがしたり顔で云う。

「何のことですか？」

お桂が訝しそうに訊いた。忠久も何のことやら分からない。お梅婆さんがひとりで何を納得しているのか――。

「くうがお桂さんを避けた理由じゃよ。忠さんが云った理由もあるじゃろうが、わしは他にもあるんじゃないかと思ったんじゃ。あやかしと化したお母上は仇である竹宮様を殺した。次は夫である樽満の大旦那じゃ。大旦那も殺すつもりでいるが、お桂さんに、やめてほしいと頼まれたなら殺意が萎えるかもしれない――それを恐れたんじゃなかろうか」

そうかもしれない、と忠久は思った。自分の罪を恥じる気持ちもあっただろうが、それよりも仇討ちの決意を鈍らせたくなかったのかもしれない。あやかしとはいえ、娘に懇願されたなら気持ちが揺らぐだろう。そうならないために、くうはあえてお桂を避けたのではないか――。

「もしそうだとしたら、わたしは母を何としても止めて見せます。憎い父ではありますが、死んでほしいとは思っておりません」

風が強くなった。戸を叩く音がする。

が、それは風ではなかった。

「ごめんよっ」と声がして、戸が開いた。

顔を覗かせたのは人足頭の与三郎だった。

「隣へ行ったら誰もいなくて、で、こっちで声がしたもんだから」と、悪びれもせずに云う。

「与三郎、どうしてここが？」

お桂が詰問すると、隣のお陸が床に額をこすりつけて謝った。

「申し訳ございません。わたくしが……」

「お陸……」

罪人を見るような目でお桂がお陸を睨みつける。

「お陸さんを責めちゃいけません。あっしが夕べ、無理に聞き出したんです、何処へ行っていたのかと。お陸さんはためらいながらも教えてくれました。考えてもみてください。樽満のお嬢様があちらこちらと歩き回っているのですから危なくて仕方ありません。しかもお供は女ひとり。拐かしにでも遭ったらどうするんですか」

そんなものは自分で何とかするとでも云いたげに、お桂は顔を膨らませた。見た目と違って、気の強い一面があるようだ。

「説教は結構です。それよりもどうしてここへ来たのです？ 何か用ですか？」

与三郎が戸の中へ入った。外には人足らしい屈強な男が四、五人いた。忠久は気になった。道中の警固にしては物々しい。

「お桂様に一刻も早くお帰りいただくためです」

「父の命で連れ戻しに来たのですね」

「そういうことです」

さあ、と与三郎がお桂を促す。

「嫌です。本屋敷へは戻りません。父と暮らすつもりはありませんから、与三郎からそう云ってください。わたしは浜屋敷で暮らします」

与三郎が薄く笑う。

笑われたお桂はわけが分からず、顔をしかめた。

「実は……大旦那様は浜屋敷におられます。ちょうどお桂様たちと入れ替わるように来られました。お桂様は竹宮様が襲われた話をご存じでしょうか？」

「ええ、先ほど知ったところです」

「城下は大変な騒ぎだったそうで、大旦那様は、次に狙われるのは自分だと、浜屋敷に身を隠されたのです」

「逃げてこられたのですね。よほど母を恐れておられるようです」

お桂も小馬鹿にしたような薄い笑みを見せた。そこには父への侮蔑が込められていた。父娘関係は完全にこじれてしまっているようだ。解決は困難かもしれない、と忠久は思った。

「番頭の義助さんまでもが怖がって逃げてきたものですから、大旦那様はお怒りになって追い返されました。二人とも本屋敷を離れては商売になりませんからね。義助さんは青い顔で渋々帰っていきましたよ」

与三郎は番頭のしくじりを話したくて堪らなかったようだ。番頭の叱られる様を思い出したのか、与三郎がくくくと笑う。

「関係ないのに逃げ出すとは……義助さんがそれほど恐がりだとは知りませんでした。が、それがどうかしたのですか？」と、お桂が苛つきを顕わにして云う。番頭を嘲笑う与三郎が気に障ったのだろう。

与三郎は真顔になった。

「とにかくお帰りください。でないとあっしが困るんです。大旦那様に、お桂に万が一のことがあったらどうするんだと叱責され、首に縄をつけてでも連れてこいと云われているんです。連れ帰らなければあっしはどうなることやら」

「何と云われても嫌なものは嫌なんです。帰るにしても、父のいない本屋敷に帰ります。どうしてもと云うのなら首に縄でもつけばいいでしょう」

やれるものならやってみなさいよと高をくくったように、お桂が云う。

与三郎は、ふうと溜め息を吐いた。

「ならば致し方ありませんね。おい！」

呼びかけに応じて外の人足たちがどかどかと入ってきた。筋骨逞しい五人の、半裸の男たちがお桂を捉えようとその手を伸ばす。本気だと悟り、お桂は青ざめた。

「待て！」と、忠久は怒鳴った。

その声に驚いた男たちの手が止まり、その隙に忠久はお桂の前に立ちふさがった。

「百姓風情が……引っ込んでろ！」

与三郎も負けじと怒鳴り返す。

今度はお梅さんが小さな身体を前に出した。

「百姓だと思ってなめてると痛い目に遭うよ。こう見えて忠さんは末松家のご子息なんじゃ。元は侍。戦にも何度も行ったことがあるんじゃ」

人足たちは怯みを見せ、後退った。末松家の名前を出され、どうしたものかと与三郎を見る。

「末松家だろうと知ったことか！ このままおめおめと帰るわけにはいかねえんだよ！」

たじろぎながらも、与三郎が、やれ！ とその目で合図すると、人足たちは互いに顔を見合わせ、お墨付きを得たとばかりに、邪魔立てする忠久に向かった。相手はひとりと気持ちの余裕もあってか、侮る目で掴みかかる。

忠久の動きは速かった。あっという間に、ふたりの顔面に拳をおみまいする。

「ここは狭い。表へ出る！」

忠久を睨みつけながら与三郎が外へ出ると、人足たちも従った。

心配はいらないからと優しく見やる忠久に、お桂が黙って頷いた。気をつけてくださいと云っているように思え、忠久も頷き返した。気持ちが通じたようで、心が晴れやかになる。しかし、浮き立つ忠久の心持ちは、外へ出ると瞬時に掻き曇った。

まずい、と思った。五人の人足はそれぞれの手にヒ首を握りしめている。素手での戦いなら五人が相手でも何とかかなると思っていたが、刃物を持たれては分が悪い。勝ち目はないだろう。それどころか、殺されてしまうかもしれない。

さらにまずいことに、与三郎の後ろには馬が控えていた。お桂を乗せるためのものだろう、用意周到なことだ。風の中にしっかりと立ち、前方に殺気立った人間がいるというのに、暢気そうに忠久を見やっている。

「おとなしくお桂様を渡せば怪我をせずにすむぞ」

「たわけたことを」

忠久が吐き捨てるように云うと、与三郎は呆れ果てた顔をした。

「愚かな男だ。命を賭したとて何になる？ 何の得もないだろうに。お桂様から金をもらおうとも思っているのか？」

「下衆め。人は金で動くと思っていやがる」

「違うのか。となると……ははあ、さてはお桂様に惚れたな。百姓ごときが惚れても……そうだったな、あんたは末松家の出だったな。だが、諦めるんだな。何不自由なく暮らしてきたお桂様があんたのところへくるはずがないだろう。振り返って己の家をとくと見るんだな」

忠久は振り返らなかった。見なくとも、そこに見窄らしいあばら屋があるのは分かりきっている。樽満のお屋敷とは比べるべくも亡い狭くて隙間だらけの家――。与三郎の云うとおり、その中に暮らすお桂を思い描くのは難しい。

「お前は空言をこしらえるのが上手いな。たいしたものだ。そんなことよりも……」

忠久は云いかけてやめた。お桂の話これをこれ以上したくなかったし、話を変えながら次に何をなすべきかを考えた。五人がヒ首を突きつけている。目の前の危機的状況を打破するには――あれを使うしかない。再び手にする日が来るとは思っていなかったが、どうやらその日が来たようだ。

「そんなことよりも……何だ？ 命だけはお助けください、か？」

与三郎が揶揄して云うと、人足たちがどっと笑った。

忠久はそろりそろりと後退り、振り返ると一気に家の中に駆け込んだ。奥に置かれた木箱の中から太刀を取り出す。二度と使いたくなかったが、やむを得ない。切っ先を向ければ奴らは怯んで逃げるだろう。

戸口から出る際、くうの寝床の桶が目に入った。そこにくうはいなかった。何処に行ったのかを考える余裕もなく、忠久は外へ飛び出した。抜き身を翳し、人足たちを威嚇する。

果たして人足たちは怯んだ。忠久が一步踏み出すと、ヒ首を突きつけたまま二歩下がった。与三郎も思わず下がったが、そんな自分が恥ずかしいのか、再び前に出た。

「そんなもの、後生大事に持っていたのか。侍に未練があるようだな」

「未練などない。村に賊が来たときのために、用心で持っていただけだが、おかげで役に立たせることができそうだ。これで形勢逆転だな。頭数はそろっていても無駄なことだ、やめておけ。ヒ首で切りつけてもその前に、その腕を叩っ切ってやるぞ」

「ふん、太刀はまともかもしれないが、腕はどうか？ どうせまともに振れないから家を追い出されたのだろう。おい、何をしている！ 相手はなまくら侍だ、恐れることはない！」

五人は忠久を取り囲んだ。嘲りの笑みを浮かべているが、それが偽物なのはすぐに見て取れた。忠久の太刀を怖ず怖ずとした目で見ている、腰が引けている。ヒ首を持つ手が震えている。

「怪我をしてはつまらんぞ。所詮、安い金で雇われているのだろう？」

同情の声で諭すように忠久は云ったが、聞く耳は持たぬとばかり、ひとりが忠久を目がけて闇雲に突っかかってきた。よほど樽満に恩義があるのか、あるいは単なる馬鹿なのか、真っ直ぐにヒ首を向けて走り寄る。できれば刀を使わずに済ませたかったが、もはや仕方がない。忠久は刀を振った。ヒ首を叩き落とし、人足の胸に蹴りを入れる。ううっと呻き声を漏らし、突っかかってきた人足はその場にうずくまった。

「まだやるか！」

他の人足たちを見やり、忠久は怒声を発した。歴然とした力の差に、人足たちは完全に怖じ気づき、戦意をなくしている。ただ与三郎だけが違っていた。苦り切った顔で忠久を睨みつけている。

「なにを尻込みしているんだ、相手はひとりだぞ！」

与三郎がけしかけるものの、人足たちは足に根が生えたように動かなかった。束になってかかったところで敵わないと悟っており、出直した方が良さそうだと目で訴えている。

「どいつもこいつも……」と、与三郎が罵る。

「かえって大旦那に伝える。お桂さんにはお桂さんの生き方がある。お桂さんの意思を尊重しろ、とな。今すぐに帰らないと、今度は与三郎、お前を叩っ切るぞ！」

忠久の最後通牒にも耳を貸さず、与三郎はなおも忠久を睨みつけていた。

なんてあきらめの悪い男だ、と忠久は啞然とさせられた。よほど樽満の大旦那を恐れているのだろう、身をもって痛みを味あわないと分からないようだ。太刀を与三郎に向け、ゆっくりと歩き出す。

と、与三郎がにやりと笑った。悪だくみが閃いた顔だった。脱兎のごとお梅婆さんの家に入る。人足たちは、なにをするんだろうとあっけにとられていたが、忠久はほぞを噛んだ。

しまった――。

お梅婆さんを抱え、勝ち誇った顔で与三郎が出てきた。

「何をするんだい。放さないかい」

手荒な扱いに、お梅婆さんが顔を紅くする。

「うるさい、黙れ！」

もがくお梅婆さんの首に、与三郎は腕を絡めた。

「刀を置け。出ないとこの首、へし折るぞ」

「卑怯な」

「卑怯で結構。大旦那様の命だ、何と云われてもやらなきゃならないんだ。さあ、早く刀を置くんだ」

云われたとおりに、忠久は刀を地面に置いた。

「そこまでさせるとは……樽満の大旦那は血も涙もないお方のような」

「戦乱の世で財をなすには、きれい事だけではすまないんだよ」

忠久は人足たちの隙を窺った。が、再び巡ってきた有利な形勢に、人足たちは余裕の笑みを浮かべていた。ひとりの人足が前に進み出て、忠久の刀を拾い上げようとしたときだった。

「与三郎、お梅さんを放しなさい。わたしが参ります」

戸口からお桂が出てきた。つかつかと与三郎の前に歩み寄り、眉をひそませて睨みつける。遅れてお陸も出てきた。

「こんなお婆さんにまで乱暴を働くとは……見下げた人たちですね、あなたも父も」と、お桂が軽蔑の眼差しで云う。

「怒らないでくださいよ。あっしはただ大旦那様の命に従っただけで……」

困惑して云う与三郎だったが、腕の力を緩めようとはしなかった。目で合図し、人足に忠久の刀を拾わせる。

「いい加減に放しなさい。父の命はわたしを連れ帰ることでしょう」

忠久の傍から太刀が離れるのを見届けて与三郎が腕を解くと、お梅婆さんはよろけながらもその場に留まった。与三郎から離れようとしな。てっきり家の中へ逃げ込むと思っていた忠久は不審に思った。

「何をしてるんです？」と訊く。

「わしを連れて行け」

お梅婆さんは与三郎に向かって云った。有無を云わさぬ響きがあった。

「はあ？」

意味が分からず、与三郎はしげしげとお梅婆さんを見た。忠久にも分からない。お梅婆さんは不愉快そうに与三郎を見返した。

「聞こえなかったのかい？ わしを樽満の大旦那に会わせな」

「会ってどうする？」

「決まってるじゃないか、腐った性根を叩き直してやるんだよ」

ふっと与三郎が笑った。忠久も可笑しくなった。お梅婆さんは本気で云っているのだろうが、どう考えても大風呂敷にしか聞こえない。門前払いを食うのが落ちだろう。

お桂も見守るような笑みを浮かべている。

「その役はわたしがやりますから」と、柔らかい中にも決然とした口調で云う。

「帰ったら籠の鳥にされてしまいますよ。それじゃ可哀想だ。わしが行ってくる」

お梅婆さんも譲りそうになかった。一度口にした手前、引くに引けないようだ。ふたりの間に与三郎が割り込んだ。

「婆さん、あんたには用がねえんだよ。引っ込んでな」

さあさあと、お桂を馬へと連れて行く。前に回って邪魔立てしようとするお梅婆さんを、忠久は押し留めた。忠久は大旦那が危機にあるのを思い出していた。くうは寝床にいなかった。もう復讐に向かったのだろう。城下へ向かったくうは、大旦那がいなくて無駄足だったことを知り、いずれ浜屋敷へ向かうに違いない。

「お桂さんに行ってもらった方がいい。お梅さんじゃ……」

「役立たずだって云うのかい？」

「そういうことではないんです。事は大旦那の説得ではなく、くうの説得なんです」

「どういうことなんだい？」と、お梅婆さんが腑に落ちない顔で訊く。

お桂も小首をかしげた。

忠久はお桂に目を向けた。

これから重要な話をしますと、目に力を込める。

「くうがいなくなっていました。大旦那が浜屋敷へ行ったのは知らないでしょうから、おそらく城下へ向かったのでしょう。しかし、いずれ浜屋敷に現れるのは間違いありません。そのとき、お桂さんにくうを止めてほしいんです。くうというよりはお母上ですね、お母上に夫殺しを思い留まるように云ってもらえないでしょうか。これ以上罪を重ねて、さらなる罪悪感を抱えないでほしいんです。くうを止められるのはお桂さんしかいません」

忠久の話を聞いていた与三郎が慌てふためいた。

「こうしちゃいられない。護りを固めないと。お桂様、さあ早く」とお桂を急かす。

「父が母を殺しに……」

肝心のお桂は人足たちに担がれて馬に乗ったが、その目は虚ろだった。あやかしと化した母の復讐が現実味を帯び、眼前に迫ってきて呆然となっている。忠久は危惧した。気は強いようだがお嬢様育ちだ、お桂にあやかしと対峙できるだろうか。

馬を取り囲み、与三郎たちは駆けていった。

お梅婆さんはまだ不満そうにしていた。人足の腕を引っぱたき、その手から忠久の刀を奪い返しただけでは気が済まないらしい。

「わしが樽満の大旦那を叱り飛ばしてやったのに」と、無念の声で云う。

忠久は苦笑いで聞き流した。馬の背に揺られ、小さくなっていくお桂を見ている。何もできない自分が疎ましかった。樽満に駆けつけたところで大旦那に追い返されるだろうし、くうを止めるにしても、お桂の方が上手くやれるだろう。忠久にできることといえば、事が上手く運びますように、と祈ることだけだった。

「行ってしまったねえ」と、お梅婆さんがぼつりと云う。

「そうですね」

「もうお桂さんはここへは来ないのかねえ。たまには来てくれるといいのだが」

「もう来ないでしょう。お桂さんがここへ来たのはくうがいたからです。くうがいなくなった今、ここには用がありませんから」

「それでいいのかい？」

忠久はまた苦笑いを浮かべるしかなかった。

「いいもなにも、仕方ないでしょう。所詮、住む世界が違うんですよ」

「そんなことはないよ。忠さんは末松家の出だ、生家に戻れば樽満の旦那も否とは云わないよ」

そうかもしれない、と忠久は思った。末松家に戻れば身分の問題はなくなる。だが――

「今さら父に頭を下げられませんよ」

お桂を嫁にできるならこんな素晴らしいことはないが、そのためだけに生家に戻るのは気が引けた。臆病者と罵った父や兄は、今度は軟弱者と笑うだろう。なにより、家名に頼っているだけで、自分の存在が何処にもない。その一方で、恥をさらしてでもお桂を得たい気持ちもある。そんなことを考えている自分が忠久は可笑しくなった。お桂自身が否を唱えるかもしれないというのに、何を先走っているのだろう。

「つまらない矜持など捨ててしまいな」と、お梅婆さんが云った。

「矜持をなくしては侍ではられませんよ。矜持を持っていれば侍には戻れません」

小さくお桂は山の陰に入り、ついに見えなくなった。陽が傾き始めている。風はほとんど治まっていたが、雲の流れは速かった。

「どのみち、侍に戻る気はないようだね。わしはもう何も云わないよ」

忠久に並んで雲の流れを目で追うお梅婆さんは寂しそうだった。お桂との別離もやるせなさそうだったが、それ以上にくうがいなくなったことが堪えているようだ。くうを傷つけたままで別れてしまった、そのことが心残りなのだろう。

涙を見せたくないのか、お梅婆さんは顔を逸らし、そのまま家へ入ろうとした。

「あっ」

お梅婆さんの驚く声に、忠久は振り返った。お梅婆さんは立ち止まって屋根を見ている。忠久も見上げた。そのにはくうがいた。屋根の真ん中辺りでうずくまっている。

「くう……まだいたのか」

屋根の上でくうが、びゃあと鳴く。

くうはずっとあそこにいたのだろうか。それなら与三郎たちも自分も気づかないはずがないから、別のところにいたに違いない。ほんの少し前からあそこにいるのだろうか、そんなことはどうでもいいことだ。問題はくうが話を聞いていたかどうかだ。聞いていたとしたら、くうは大旦那が浜屋敷にいることを知っている。くうが真っ直ぐに浜屋敷へ向かったなら、護りの備えは間に合わないだろう。

「ああやっていると、猫がのんびり日向ぼっこをしているようにしか見えないんだけどねえ」

目を細めてお梅婆さんが云う。忠久は頷いた。

「まったくです。とてもあやかしには見えませんが、竹宮様ともうひとりを噛み殺しています。そしてその牙を樽満の大旦那に向けようとしています」

「大旦那に死なれてはお桂さんが可哀想だ。忠さんがくうを説得してくれないかい？ 忠さんは命の恩人だから話を聞いてくれるかもしれないよ」

お梅婆さんがつつと前に出た。身体を丸めているくうに呼びかける。

「くう、怖がったりして悪かったね。だけど、あやかしは誰もが怖いんだ。仕方がないんだよ。忠さんが話があるそうだから」

やるとも云ってないのに、お梅婆さんは強引だった。しかし、いつものことなので忠久は別段、腹も立たなかった。

忠久はくうを見つめた。何かの気配を感じたのか、くうが顔をもたげる。

「なあ、くう。というより樽満のお内儀.....あなたが樽満の大胆那を恨む気持ちは充分に分かります。わたしにも家族はいますから。疎遠になっているとはいえ、不条理な仕打ちを受けたならわたしも黙ってないで、何らかの報復を果たすでしょう。武家に生まれたあなたなら仇討ちをなさって当然です。女だてらに、生家を滅ぼした竹宮様を討たれたのは誠にあっぴれな所行であり、なんら非難されることはありません。ですが.....夫であり、お桂さんの父である大胆那にまで復讐を果たすというのはいかがでしょうか。お桂さんも大胆那を恨んでいますが、あなたに殺してほしいとは望んでおりません。憎くはあっても生きていてほしいと思っています。あなたはお桂さんを悲しませたいのですか？ 幼い弟もいると聞きました。寄る辺ないふたりが哀れだと思いませんか？ 大胆那は充分に恐怖を味あわれたようです。自分のしでかしたことを後悔なさっていることでしょうか。もう赦してあげてはどうですか？ わたしからもお願いします。お桂さんたちのためにも、恨みを鎮めてはいただけないでしょうか」

忠久は夢に出てきた女性を思い浮かべながら、くうをずっと凝視していた。くうも身じろぎしなかった。話を聞き漏らすまいとするかのように、忠久の目をじっと見ていた。そして忠久が話を終わると、その目を空へ向けた。思案しているようだ。考えを改めてくれ、と忠久は祈った。

「これからも一緒に暮らしませんか？ そうすればお桂さんはあなたに会いたいときにいつでも会えるし、新たな寝床と探す必要もない。もしどうしても復讐を果たすというのなら……わたしはあなたを見捨てなければなりません」

脅すような言い方はしたくなかったが、この際仕方がない。自分の本気を忠久は伝えたかった。

くうが突然、身体を起こした。屋根からひょいと地面に飛び降りる。

「わしからも頼みますよ。大旦那とは情を交わした仲だ、赦せないことはないでしょう？」

拝まんばかりにお梅婆さんは云ったが、くうの反応は鈍かった。無視するかのように忠久たちの前を通り過ぎ、街道への小道を歩き出した。

「何処へ行くんだろう？ 浜屋敷かねえ……」

「おそらくそうでしょう。くうは私たちの願いを聞き入れてはくれませんでしたね」

「忠さん、浜屋敷に報せておやりよ。くうは大勢の猫を引き連れるんだろ？ お桂さんが怪我をしないとも限らないから護ってやりな」

忠久は頷き、くうのあとを追った。

くうは後ろから来る忠久など眼中にないとばかりに、ひたすら前を見据えて歩いている。忠久が走って追いかけるとすぐに追いつき、追い越せた。それでもくうは何の反応も示さない。これなら先に浜屋敷に着きそうだと思って街道を浜町に向かって急ぐ。ふと気になって振り返ると、くうは街道を城下の方へ曲がっていた。大旦那が浜屋敷にいるのを知らないようだ。ひと安心した忠久は、このまま浜屋敷へ行こうかと思った。何も知らずにくうが城下へ行けば、かなりの時間を稼げる。くうの侵入を阻止するのに十分な備えができるだろう。大旦那を避難させることもできるかもしれない。だが――釈然としない思いもあった。

くうの歩みは何処か確信に満ちていた。疑うことなく城下へ向けられていた。考えすぎかもしれないが、聡いくうが、お桂や与三郎がここへやってきた理由を知りたがらないはずはなく、皆の話を聞いていなかったとは思えない。話を聞いたくうは、大旦那がいないのを知った上で城下へ行ってるのではないだろうか。理由は分からないが、なんであれ、何らかの意図があって城下へ向かった気がする。

踵を返し、忠久も城下への道を進んだ。くうの足に遅れないように、陽が陰り始めた道を急ぐ。もう追い越そうとはしなかった。大旦那が本屋敷にいないのを知っているのであれば、くうは城下の別のところへ向かっているとも考えられる。竹宮様に協力的だった家臣に復讐を果たそうとしているのだろうか。それを確かめねばならない。

と、一匹の猫が現れた。道の横の草むらからひょいと姿を見せ、くうに付き従っていく。まるで下僕のように距離を保って歩き、時折振り返って、警戒するように後方の忠久を見やる。

二匹、三匹と増え、陽が沈んだ頃には、忠久の前を歩く猫の数は十匹を優に超えていた。薄暮の中でうごめくその様は、奇異で不気味だった。くうの統率の下、この猫たちによって竹宮家は襲われ、惨劇が行われたのだろう。城下まではまだまだ道のりがあり、その数は増え続けるに違いない。聞いた話では数十匹の猫だったが、この様子では百匹を超すかもしれない、忠久は空恐ろしさを覚えた。

闇夜を仄かな月明かりが照らしている。

くたくたに疲れて城下にたどり着いたとたん、猫の数が倍加した。城下の猫がすべて集まってきたかのようだ。その数は百匹でもきかないかもしれない。通りも屋根も至る所において、街を覆い尽くさんばかりの勢いだった。

我が物顔で闊歩する猫たちに、たまたま通りかかった町人が恐れおののいて道を空け、板塀に張り付いてやり過ごそうとしている。次々に戸が閉じられ、猫が出たぞ、の聲があちこちで上がる。誰もが夕べ起きた竹宮家の惨劇を知っており、巻き込まれては敵わないと必死に避けている。

城下は猫が占拠する街に変わった。

一匹の犬が勇猛果敢にも吠え立てたが、押し寄せてくる猫の群れに尻尾を巻いて逃げた。数匹の猫が、逃がしてなるものかと追いかける。整然と列をなしていた猫たちだったが、あまりに数が増えてくると、そこそこで仲間内による諍いが起きた。興奮状態にあるようで、身体が当たったとか、ちょっとしたことが引き金となっている。その災難がいつ我が身に降りかかるかもしれず、用心のために忠久は周りを見渡した。すると、いつの間にかすっかり猫の群れに取り囲まれていた。数え切れないほどの猫が、お前は味方か敵かと問うように、唸り声を上げながら忠久とともに歩いている。忠久が立ち止まったなら、猫たちは一斉に忠久を目がけて牙をむくだろう。

猫の流れははっきりと樽満を目指していた。目的地は他ではなく、樽満で間違いないようだ。くうは大旦那がないのを知らなかったに違いない。考えすぎだったようだ。くうは知らないままに来てしまったらしい。

樽満の本屋敷の前には侍や無頼の輩が十人ほど立っていた。金で雇われた間に合わせの警固なのだろう、刀を抜き、やってくる猫を待ち構えている。たかが猫と侮っていたようだが、そのあまりの数の多さに、震え上がってあっさり職務を放棄し、走り去った。ここでも逃げる侍を数匹の猫が追いかけた。逃げ遅れ、転んで地面に伏した侍に、猫たちが次々に襲いかかる。侍は必死だった。腕を牙で噛みつかれ、背中を爪で引っ搔かれながらも何とか振りほどき、立ち上がって逃げた。話が違うじゃないか！ と不平を口にし、這々の体で走り去った。

猫たちの動きが慌ただしくなった。板戸の横の土壁に向かい、狂ったように爪を立てている。何かの使命に駆られたかのように、代わる代わる交代し、穴を開けている。いくら何でも無理だろうと思ってみていると、僅かだった窪みは次第に深さを増し、穴となった。穿たれた穴はやがて猫が通るには十分な大きさになり、くうを先頭にそこから猫たちが続々と中へ入っていく。忠久も穴へ向かった。だが、忠久が入るには小さすぎた。くうに遅れまいと板戸を押したが、びくともしない。裏に回れば何とかなるかもしれないと向かいかけたとき、女の悲鳴が上がり、大勢がばたばたと板戸へと駆けてくるのが分かった。猫の侵入に驚いて逃げてきた使用人たちだろう。板戸を内側から開け、我先に忠久の前を駆けていく。その中に子供の姿があった。その子供は怯えているようには見えず、むしろ周りの大人たちが右往左往するのを面白がっているようだった。声をかける暇がなかったので確信はないが、あれがお桂の弟ではないか、と忠久は思った。七つほどの年頃だし、上品な面立ちがお桂に似ている。

義助さんがやられる！ と叫ぶ声がした。番頭の義助だろう、逃げ遅れたらしい。戦場のように騒然としている樽満の中へ忠久は入った。猫たちを踏みつけないように気をつけながら奥へと向かう。辺りは荒れ放題になっていた。猫たちによって壺は割られ、襖は破かれ、何もかもが壊され尽くしている。いつ猫たちが自分を攻撃してくるかと思っていたが、そんな様子は窺えなかった。ずっと不思議に思っていたことだが、胡乱な一瞥をくれるだけで、敵意は感じられない。おそらく、くうが指図したのだろう、どの猫も忠久がそこにいないかのように関心を示さない。

下僕のような猫たちに囲まれ、くうは奥の座敷にいた。床に寝ている男の胸に乗っかっている。義助だろう、その男は目を閉じ、くうを払いのけようとしているのか、両手で宙を掻いていた。言葉にならない呻き声を漏らし、まるで熱病に冒されたかのように玉の汗を額に浮かべている。

何をしようというのだろうか。竹宮様と同じ目に遭わせようというのか。確か竹宮様は眠らされて殺されたと聞く。くうは義助の胸に乗ったまま、じっとしていた。安んじているように見えなくもないが、忠久は、夢の中で義助に話しかけているのではないかと思った。ほんの二言、三言だったが、自分も夢の中で話した覚えがある。

義助の手の動きが変わった。両手を真っ直ぐに伸ばし、宙で何かを掴もうとしている。力を込めているらしく、手先が震えている。

突然、くうは立ち上がった。怒りを顕わにして義助の首元に寄る。何をするつもりかはすぐに分かった。義助を血祭りに上げるようだ。いなかった大旦那の身代わりとして、腹いせに殺すのだろう。関係のない義助を殺すとは、くうは狂ってしまったに違いない。いや、怨念に乗っ取られ、お桂の母の正気はくうの体内に埋没してしまったのだろう。いまや心を持たない悪しきあやかしと成り果ててしまったようだ。

やめろ！ と叫ぼうとしたが、声が出なかった。助けに行こうとしたが、足も動かない。くうは振り返り、お前はそこで見ていろと云わんばかりに、冷たい目で忠久を見た。忠久はもがいたものの、どうすることもできなかった。

と、くうの身体が変化した。大きくなり、話に聞く獅子のようになった。いや、獅子でもない。広げた口から剣先のような鋭い牙が、上下二本ずつ、するするっと伸びた。こんな生き物は見たことがない。まさにあやかしだ。

変化したくうが義助の首に食らいつく。

ひと噛みで血が噴き出し、瞬時に床は流れ出た血で満たされ、宙に伸ばしていた義助の両手がぱたりと落ちる。くうは、顔はおろか、返り血で身体のがほとんどが血に染まった。

首が身体から離れ、ごとりと転がる。義助が事切れたのを見届けると、くうはその姿を元に戻し、静かに座敷を出て行った。他の猫たちがあとに続く。よく働いたと満足そうに帰る猫もいれば、まだ壊したりないと不服そうに引き上げる猫もいた。義助の死体からぞろぞろと離れていき、最後の猫が、お前もうかうかできないぞとばかりに、不敵な笑みを見せ、去って行く。

忠久はぞっとした。

殺されてもおかしくなかった。何の気まぐれか、それとも微かに正気を留めていたのか、くうは忠久を殺さなかったが、それはどちらに転んでもおかしくなかった。くうの気分次第では目の前にある義助の死体の、隣に横たわっていたかもしれない。

くうは狂っている。あやかしに心に乗っ取られている。次は大胆那だ。いや、お桂かもしれない。狂ったくうは見境なく復讐を果たそうとするだろう。

急がねばと思い、足を踏み出すと、くうの術が解けたのか、足は動いた。座敷を飛び出した忠久は、思わず息をのんだ。本屋敷の中は一段と荒らされ、さながら嵐が過ぎたあとのようだった。壊れたものが至る所に散乱し、台帳の類いは破かれ、着物が引き裂かれている。厨の皿は割られ、甕が倒れて水浸しになっている。野菜や干物が食い散らかされ、酒の匂いさえ漂っていた。千鳥足の猫が何匹かいたことだろう。

樽満の本屋敷を出た忠久は、末松家を目指した。近くはないが、ひとつ走りで行ける距離で、これから浜町へって返すのに必要なものがあつた。

街中は深閑としていた。あれほどいた猫たちは一匹もおらず、出歩いている者もひとりもない。明かりは何処にもなく、城下は死の街と化していた。

末松家とて例外ではなく、門は堅く閉まっていた。

「開けてくれ！」

忠久の声と戸を叩く音が闇夜に消えていく。

ほどなく戸の向こうに人がやってきた。

「どちら様で？」と訊く。

三年ぶりに訪れた我が家だったが、忠久はその声に聞き覚えがあった。

「ああ、春吉か。忠久だ、早く開けてくれ」

「忠久様……本当に忠久様ですか？」

下男の春吉の声には怯えがあった。あやかしが騙っていると思っているのだろう。無理もない。唐突な訪問を怪しまれても仕方がなかった。

「安心しろ。あやかしどもは何処かへ行ってしまった」

それでも春吉はためらっていた。

「どういったご用件で？」

急いでいるのになかなか開けようとしない春吉に、忠久はしびれを切らした。

「我が家へ帰ってきたというのに、いちいち理由を問うのか？ いいから開けろ」

戸がほんの少しだけ開く。忠久は強引に押し広げ、中に入った。

「馬だ、馬の用意をしろ」

春吉は百姓のなりの忠久を本物かどうか、いかがわしそうに見ている。

「お百姓になったとは聞いておりましたが……」

記憶にある忠久と目の前の忠久がそぐわないらしい。

「そんなことはどうでもいい。それよりも」

じろじろと眺めて、春吉はやっと納得してくれた。

「お元気そうでなによりです。あやかし騒動で城下は大変な騒ぎに……」

久しぶりの再会を喜び、春吉が笑顔を浮かべる。忠久も嬉しかったが、いまはそれどころではない。世間話を始めそうな春吉を尻目に、忠久は厩へ向かった。

「忠久様、お待ちください。お館様の許しを得ませんと」

あとから慌てて追ってきた春吉が狼狽して云う。

「ちょっと借りるだけだ」と、忠久は語気を荒げた。

「しかし……あとでわたしが叱られます」

「百姓に馬を貸したとあっては叱られるのか？」と、嫌味ったらしく云う。

「わたしはただ……」

春吉はいまにも泣き出しそうだった。

「云いすぎたようだ、すまん」

苛ついて咄嗟に出た言葉を忠久は後悔し、恥じた。春吉に咎はない。

「いえいえ、謝られては却って……」

「お前の立場もあるだろうから、早急に取り次いでくれないか。なにしろ急いでいるのでな」

「それでは」と、春吉が母屋へ向かおうとすると、当の父が現れた。久しぶりに顔を合わせるといのに、父はにこりとしなかった。迷惑そうですらある。

「ご無沙汰しております」と、忠久は殊勝に頭を下げた。

「何事かと思っけてきてみれば……挨拶もせずに厩で何をやっておる？」

「挨拶に伺わなかったのは申し訳ありません。急いでおりますのでご容赦ください」

「何をそんなに急いでいるのだ？ 馬が必要なのか？」

「これから浜町まで行きます。馬をお借りして一刻も早く参りませんと……」

「浜町？ 浜町に何かあるのか？」

詳細を知るまで父は話してくれそうになかった。忠久は矢も盾も堪らなくなった。

「樽満の大旦那のところへ参らねばならないのです。大旦那に会って」

「猫をけしかけるといのか？ 猫の化け物を」

「けしかける？ 仰っている意味が分かりかねますが」

「最前、樽満の本屋敷へ行っただろう、あまたの猫を引き連れて。知らぬとは云わせぬぞ。見かけた者が報せてくれたのだ。末松家の末弟があやかしを操り、樽満を襲っているとな」

忠久は驚いた。なぜそんな話になるのか、わけが分からない。

「違います。誤解です。樽満の大旦那に危機が迫っているのを教えに行っただけです」

事の真偽を確かめるように、父が忠久の目を見据える。

「そうか。大旦那は避難されたとの噂を聞いたが、どうやら無事のようなようだ。ならばよい。夕べは竹宮様が殺された。わしも死体を見たが、刃物で切ったような切り口だった。今夜は樽満が襲われ、そこにお前がいたとあっては、お前が竹宮様を襲ったと曲解されかねない。まあ、わしもお前がまさかあやかしを操っているとは思わなかったが、それにしても何故、大旦那を助けようとした？ 大旦那に何か恩義でもあるのか？ それなら、わしが知らなかったでは具合が悪いが、どうなんだ？」

「大旦那に恩義はありません。娘のお桂さんと知り合ったのです。お桂さんは猫を探しておられて……」

まどろっこしかった。これまでの経緯を説明していたのでは時間がもったいない。

「とにかく急いでおりますので。春吉、鞍を」

春吉が鞍を用意する間ももどかしかった。春吉から鞍を奪うようにして受け取ると、手早く馬の背に乗せ、厩から引き出す。

「まだ話は終わっておらんぞ」

父の言葉を無視して忠久は馬にまたがった。

「子細はいずれまた」

城下の闇を忠久は駆けた。久しぶりの乗馬だったが、身体はしっかり覚えていた。手綱をさばく手に力を込めると、侍だった頃に戻った気がした。百姓では味わえない爽快感に包まれ、忠久は臆気な心残りがあるのを感じた。自分の進む道は百姓でなかったのかもしれない。さりとて、侍に戻る気もない。

街道の何処かで猫の群れに遭遇すると思っていたがそんなこともなく、行きはあれほどかかったのに帰りはあっけなかった。夜半過ぎに村に着いた忠久は、家に入るとすぐにくうの寝床を確かめた。桶は藁があるだけで空だった。くうはいない。昨日、くうが帰ってきたのは今頃だった。先に着いて休んでいるかと思ったが、あやかしとはいえ、馬より速くはないようだ。それとも何処かへ行ってしまったのか。何処かで英気を養っているのか。まさかすでに浜町への道中ではないだろう。

隣を見やると、明かりはなかった。お梅婆さんは寝てしまったようだ。樽満の本屋敷が襲われた話を聞きたがるだろうが、起こすには忍びない。忠久は再び街道に馬を急がせた。

馬だと浜町まではあっという間だった。馬の疲れを危惧したが、大丈夫なようだ。

街に荒れた様子はなく、所々で明かりも灯っている。やはりくうはまだらしい。

本屋敷と同じように、浜屋敷の前に十人ほどの人足が立っていた。馬上の忠久を胡乱な目で見やる。人足のうちの何人かは村にやってきた連中だった。

「何しに来た」と、いきなり喧嘩腰で云う。

「大旦那に火急の用があつてきた。会わせろ」

「大旦那様はそれどころではない。とっとと帰れ」

門前払いを食わず気だろうが、そうはいかない。

「ならばお桂さんに取り次げ。お前たちでは話にならない」

不服そうな顔をしたものの、末松家の御曹司と知っている人足は無下にできないと判断したようだ、どうする？ と、相談する声が微かに聞こえた。そしてひとりの人足が板戸の中へ入っていった。忠久は待つしかなかった。拒絶の反応がなかったからお桂を呼びに行ったと思ったが、やがてやってきたのはお桂ではなかった。

「またあんたか。お桂様の気を引こうと助っ人にでもきたのか？」

「違う。手助けにはきたが、とにかく中に入れろ」

「樽満に係わりのないあんたを中に入れる道理はない」と、与三郎が迷惑そうな顔を顕わに云う。今度は与三郎が門前払いを食わず気らしい。

「道理はないが、どうしてもお桂さんの耳に入れておかねばならない話があるのだ。追り返したとあっては、あとでお桂さんに叱られるぞ。お桂さんばかりではない。大旦那にも怒られるぞ」

大旦那と聞いて与三郎が動揺を見せた。事の重大さを悟ったらしい。馬を裏に連れて行かせ、急いで板戸を開けて忠久を中に入れる。

屋敷の中へ入ると、与三郎は歩きながら、昔から仲間であるかのように、忠久に憂慮の顔を近づけた。昼間、忠久を殺しかけたことなど忘れているらしい。

「それで……お桂様に話したのは何だ？ 一応知っておかないとな」

嘘を吐いてお桂に近づこうとしているとでも思っているのだろうか。くうがもうすぐ襲いにやってくるというのに、まるで切迫感が窺えない。

「くうが本屋敷を襲った。百匹ほどの猫を引き連れてな。そのせいで本屋敷は手がつけられないほど壊されてしまった」

「化け物は向こうへ行ったのか。退治してやろうと思っていたのに、残念だ」

「本屋敷の次はこっちだ。くうは大旦那がいるところへ必ず来る。まだ出番はあるぞ。お前の活躍が愉しみだな」

「ああ、任せとけ」と、与三郎が安請け合いをする。

与三郎に当てこすりは通じなかったようだ。いつまでそうしてられるやら、と忠久は思った。与三郎とて、獰猛な猫の群れを目の当たりにすれば、戦う気は起きずに逃げ出すことだろう。

与三郎はその後の話を聞いたが、忠久にそのつもりはなかった。まずはお桂だ。

「ああ、そうだな」

曖昧に云っていると、お桂のいる座敷に着いたようだ。与三郎が足を止めた。

「末松忠久様がお見えになりました」と、襖の向こうに云う。

すっと襖が開く。座敷にいたのはお桂とお陸だった。座ったままで軽く会釈する。そしてもうひとり、床の真ん中に寝ている老人がいた。樽満の大旦那に違いない。番頭の義助がそうだったように、竹宮様がそうだったように、くうによって眠らされているようだ。

「わざわざお越しいただいて恐縮です。くうはこちらへ来ると思っていたのですが、未だに来なくて……。ああ、眠っているのがわたしの父です」

分かっていると忠久が頷くと、与三郎が口を開いた。

「化け猫は本屋敷へ行ったそうです」と、己の仕事ぶりを顕示するかのよう云う。

そうだよな、と忠久に顔を向ける。

「本屋敷へ？ くうは父を狙っているのではなかったのですか？」

「大旦那がいらないとは知らずに行ったのでしょう。こちらへ来ると思ってわたしはくうのあとを追ったのですが、くうは真っ直ぐ本屋敷へ行きました。しかし、いないのを知ったくうは、いまにも姿を現すに違いありません。こうして大旦那が眠らされているところをみると、そのときは近いはずですが、いつからなのですか、大旦那が眠っているのは？」

「わたしが戻りましたときにはもう。人足の話しでは、父は積み荷の差配をしているときに突然倒れたそうです。これはくうの仕業なのですか？ 病気か何かでは？」

「残念ながら、くうの仕業でしょう」

「やはり……。では、くうがきたらお願いしてみましよう、父を目覚めさせ、命を助けてほしいと。わたしが頼めばきっと聞いてくれるはずですが、誠意を持って赦しを請えば……」

「それは……無理かと思えます」

忠久は冷然と云い放った。酷かと思ったが、お桂に、可愛がっていた頃のくうではないことを知ってもらわねばならなかった。

「どうしてですか？ 母はわたしの頼みならたいいのことは聞いてくれました」

母を悪く云われたと思ったのだろうか、お桂がむきになって云う。

「もはやお桂さんの頼みを聞いてくれた優しいお母上ではないからです。くうは狂ってしまいました。憎しみの怨念に支配され、お母上は心をなくされてしまったのです」

「そんな……信じられません、母が心をなくしたなどと。母は母です。くうに憑依しているのかもしれませんが、怨霊などではありません。確かに父や竹宮様を恨んでいるのかもしれませんが、誰彼構わずに災いをなすとは思えません。話せばきっと分かってくれるはずですよ」

お桂は頑なに信じようとしなかった。それはいじらしくもあったが、やっかいでもある。事実を直視しなければ大旦那どころか、皆の命が危ない。

次の一言でお桂が抱えている崇高な母親像は崩れてしまうだろう。辛いが、それが自分の役目だ、と忠久は思った。

「くうは……番頭の義助さんを殺しました」

忠久の淡々とした物言いに、えっ？ と、三つの声が同時に上がる。お陸と与三郎、そしてお桂が忠久を驚愕の表情で見やる。何を云い出すのだろうと、忠久が詳細に話すのを待っている。

「わたしは目の前で見ていました。くうはまさにあやかしでした。その姿は長い牙を持った獅子のようで、やり口は竹宮様を殺したのと同じでした。長い牙で首に食らいつき、その首を噛み切ったのです。血がどくどくと溢れ、首がごとりと転がって義助さんは絶命しました。殺すべき大旦那がいなかったために、腹いせに殺されたのです。狂ったくうは誰かを殺さずにはいられなかったのでしょうか。慈悲の心などない、残忍なあやかしに過ぎないのです」

「ああ、なんてこと……」

お桂は茫然自失の体だった。動揺のあまり気を失いそうになり、倒れかかったところをお陸に支えられた。お桂の代わりに話すように、お陸が忠久に視線を向ける。

「番頭の義助さんを殺すとは……忠久様の仰るとおり、奥方様は狂われたのかもしれませんが。義助さんが樽満に来られたのはまだ子供の頃で、お桂様がお生まれになる少し前でしたから、かれこれ二十年になります。実直に働く義助さんを大旦那様は信頼され、頼りにされていました。奥方様におかれても同じです。わたしも含めて家族同然に接していました。お桂様を妹のように可愛がられて……。それなのに殺してしまうなんて……乱心なざったのです。奥方様はもう……」

お陸の目からはらりと涙が落ちる。

何かを思い出したかのように、はっとお桂が顔を上げた。

「吉助はどうになりました？ 弟の吉助は」

「使用人たちとともに避難されたようです。中から出てくる、それらしい子供を見ました」

「本屋敷に子供はひとりしかおりません。吉助は無事に逃げたようですね」

お桂が安堵の笑みを浮かべる。

「無事だからよかったものの、一步間違えばどうなっていたことか……」

お陸が呟くようにい云うと、お桂の笑みは消えた。

与三郎が躊躇しながらも、身体を少しだけ前に出した。何か云いたいようだ。

「ひょっとしたら義助さんは、大旦那様を赦してほしいと云ったのではないのでしょうか。しかしくうは聞き入れなかった。邪魔する者は誰であろうと容赦しないのでしょうか。もはや説得できるとは思いません。一刻も早くここを離れるべきです」と、お桂に目を向け、切実に云う。

与三郎が云うように、義助は恩義のある大旦那の助命を嘆願したのかもしれない。

お桂を除く三人の考えは一致した。家族同然の義助をも残虐に殺すくらいだから、くうにはもうお桂の母の心は残っておらず、恨み骨髓の大旦那を殺すのに二の足は踏まないだろう。

今度はお陸がお桂に目を向けた。

「お桂様の奥方様を思う気持ちは分かります。自分で何とかしたいというお気持ちも分かります。ですが、くうは説得するお桂様にも危害を加えるかもしれないのですよ。そんな危ない真似はおやめください」

続けざまに忠久もお桂の説き伏せに加わった。

「お陸さんの云うとおりです。くうは竹宮様を殺害した際も居合わせた者を殺しています。家人ではないようですから客人だったのでしょう。関係のないそんな者まで殺しているのですよ」

「重ねてお願いします。おやめになってください」と、お陸が悲痛に訴える。

「それではどうしろと？ 父が殺されるのを黙ってみていろとでも云うのですか？」

怖いほどの剣幕でまくし立てるお桂に、お陸は言葉が出なかった。たじろぎ、己の思慮の足りなさを恥じている。やがてやってくるくうにどう対処するのか、忠久にも善後策が浮かばない。

与三郎がおもむろに口を開いた。

「親交のある漁師たちに声をかけてみるか。樽満のためだったらすぐさま十人や二十人は集まるぞ。そしたら護りを固めて、その隙に大旦那様を担いで逃げるんだ」

忠久は首を横に振った。眠っている大旦那は担いで逃げるしかないが、そんな人数ではたいした足しにはならないし、駆けつけてくれたところで逃げ出すだろう。板戸を護っている人足たちにも同じことが云える。あの猫の大群を見たら散り散りになってしまうに違いない。

「駄目か？ 漁師だってあんたが思っている以上に腕っぷしはあるぞ」

「くうが引き連れてくる猫の数をどれくらいだと思ってるんだ？」

「さあな。二十匹か、三十匹か、そんなものだろう。この辺りに猫はあまりいないからな」

忠久は小馬鹿にするように、静かな笑みを浮かべた。

「百匹はくだらない」と、半ば脅すように云う。

凶らずも脅されたのはお桂たちだった。

「そんなに」と、同時に驚きの声を漏らす。

「嘘を吐け。何処にそれだけの猫がいる。謀ろうたってそうはいかないぞ」

鼻で笑う与三郎に、忠久はさらなる脅しをかけた。

「国中から集まればわけがない。今度は二百匹や三百匹かもしれんぞ。本屋敷では侍でさえ逃げた。漁師やこの人足では護りきれないだろう」

「しかし、大群ではあってもたかが猫じゃないか。板戸さえ嚴重に……あっ、襲われたということは……開けたのか？ あやかしはそんなこともできるのか？」

「開けはしなかった」

「それじゃどうやって？」

「土壁に穴を開けた。狂ったように次から次と交代しながら、あっという間だった。この屋敷の土壁に穴を開けるのも造作ないだろう。そこから入り込んで、中を荒らしながらここへやってくるんだ。ここで護っていても、くの術のせいで金縛りにあったように身動きがとれなくなってしまう。わたしは義助さんが殺されるのを見ているしかなかった」

云い終わってから忠久は後悔した。これでは大旦那が殺されるのを見ているしかないと言ったも同然で、何をして無無駄だと宣言したに等しい。

ふたりの女性も、そして与三郎もがっくりと肩を落とし、明らかに気落ちしていた。

場が最悪の雰囲気になっている。責任を感じた忠久は失地回復を凶った。

「とにかく、くうが来る前に逃げよう。大旦那を別のところに移すんだ。お母上が知らないようなところに、何処か心当たりは？」と、お桂に訊く。

お桂は考えを巡らせていたが、やがて諦めて首を振った。

いい考えが浮かんだとばかりに、お陸が口を挟んだ。

「船はどうですか？ 海の上なら大丈夫でしょう」

それしかないと思ふ忠久は思った。あやかしとなったくうはどうか分からないが、少なくとも猫の大群は追ってこれないだろう。まずは沖へ逃げ、そこから遠い港へ行けば、くうも追ってこれないかもしれない。もしかしたら復讐を断念するかも――

「残念ながら」と、与三郎が無念を顕わに云う。

「何が残念なんだ？ 船がないのか？」

「船はある。が、先ほどまで風は強く吹いていたのに、いまは凪いでいる。船は動かないぞ」

くうは風まで操るのだろうか。

「打つ手なしか……」

忠久がぼつりと呟くと、皆が落胆に黙ってしまった。

と、与三郎が皆を見渡した。

「相手はあやかしだ。ならばお坊さんに調伏を頼むのはどうだろう。確か街外れに高名なお坊さんがいたはずだ。あっしは信心深くなくて存じ上げないが」

希望の灯りはまだ消えてないとばかりに、与三郎が嬉々として云う。

忠久は釈然としなかった。酷い気がする。お桂は、と見ると、もの悲しい顔をしていた。あやかしとはいえ、母が調伏されるのはやりきれないのだろう。

「泉覚和尚のことですか？」と、お陸が訊く。

「ああ、そうそう。そんな名前だった。その偉いお坊さんをお願いして……」

己の名案を得意そうに語り始めた与三郎だったが、突然、どたどたと大きな音がして、話は中断させられた。誰かが廊下を走ってくる。その者はいきなり襖を開けた。

「大変です。屋敷は猫に囲まれてしまいました。ものすごい数の猫です。他の者は皆逃げました。お桂様たちも早く」

それだけ云うと、人足は走り去った。

その場が凍り付く。忠久も呆然となった。ぐずぐずしていた自分が悔やまれる。

与三郎が立ち上がり、大旦那に近づく。

「担いでいたら逃げ遅れてしまいますよ。早くお逃げなさい」と、お桂が叱咤する。

「ですが……」

「父はわたしが何とかします。ですから、与三郎はお陸を連れて逃げなさい」

「わたしもお桂様とともに残ります」

梃子でも動かないとばかりに、お陸が云う。

「なりません。わたしと父に万が一のことがあったら、誰が吉助の面倒を見るのですか。お陸しかいないのですよ」

「万が一などと」

「お陸が云ったのではないですか、くうは狂っていると。わたしはここであやかしと化したくうに、ほんの少しでも母の心が残っていることに懸けてみます。だからあなたはここを出なさい。さあ、与三郎、お陸を連れて早く逃げるのです」

与三郎がお陸を無理矢理立たせると、心残りを見せながらも、お陸は与三郎に従った。部屋に留まっているのは三人になった。お桂と忠久と、そして眠ったままの大胆那。

「忠久様もお逃げください」

「いや、わたしも残ります。わたしがくうを拾わなかったならこんなことにはならなかった。すべてはわたしのせいです」

「それは違います。忠久様が拾わなかったとしても、いずれくうは復讐を果たそうとしたでしょう。忠久様のせいではありません」

だから逃げてください、とはならなかった。お桂は無理に忠久を座敷から追い出そうとはせず、忠久がそこにいるのを黙って見ていた。

辺りが騒がしくなってきた。大胆那が不意に、うんうんと唸る。くうの見せる恐ろしい夢に苛まれ、苦悶の表情を浮かべている。

あちらこちらから猫の不快な鳴き声が聞こえ始める。何かの壊れる音がして、お桂がびくりと反応する。恥ずかしそうに立ち上がると、座る場所を変えた。襖と大胆那の間に座る。くうが入ってきて、盾となって護るつもりなのだろう。忠久もお桂に倣い、その隣に座り直した。

くうはどうでるだろう。大胆那の前に座るふたりを目にし、力づくで踏み越えていくだろうか。

ふとお桂を見ると、膝頭に置かれた小さな握り拳が震えていた。何かを必死に耐えているようだが、それはいまにも潰えそうだった。忠久はその拳を手の平で包んだ。

「大丈夫」と、微笑みとともに頷く。

お桂も微笑み、頷いた。

くすぐったいような気恥ずかしさがふたりの間に流れた。が、それは一瞬にして終わった。

がりがりと、目の前の襖が爪で引っ搔かれる。あっという間に小指ほどの穴が開いた。すぐに穴は大きくなり、きじ猫が顔を覗かせた。斥候よろしく中の様子を窺うと、そこに大旦那がいるのを安心したのか、再び穴を拡げ始めた。穴は猫が充分に通れるまでに拡がり、今度はくうが顔を出した。義助の血に染まっていて、いかにも禍々しく、悪辣に見える。

「くうなの？」と、お桂が不審の声で訊く。

「間違いなく、くうです。変わり果ててしまって分かりにくいでしょうが」

「本当に義助さんを殺し――」

お桂の言葉がとまった。口を動かしているものの、言葉が出ないらしい。どうしたのかしらと、不思議そうな怖じけるような面持ちを忠久に向ける。くうの仕業だ。義助が殺された際もそうだった。忠久も試してみた。だが、やはり同じように息が抜け出ていくだけで言葉にならなかった。

襖の穴を抜け、くうがその姿をふたりの前に現した。全身のほとんどを血まみれにしたくうを見て、お桂が顔をしかめる。そんなお桂には関心がないとばかりに、くうが悠然とお桂の横を通り過ぎていく。大旦那のところへ行くつもりだ。阻止しようと、忠久は身体の向きを変えようとした。しかし、動かせない。動かせるのは目玉だけで、くうの行方を目で追ったが、くうはすぐに視界から外れてしまった。お桂も動かせない身体をもぞもぞさせている。我が身に起きている怪異に驚き、おののいていることだろう。どうにもしてやれない自分が、忠久はじれったかった。ただ、自分にできる唯一のことをした。お桂の手を強く握りしめる。やがてくうは獅子のような化け物へと変化し、長い牙で大旦那の首を噛み切るだろう。その次はお桂かもしれない。

そうはさせるかと強い衝動が起こり、忠久は立ち上がろうとした。しかし、虚しくも身体は動かない。

うんうんと、大旦那の唸り声がまたしても始まった。ほとんどが聞き取れない大旦那の呻き声に、ときおりそれと分かる言葉があった。すまないとか、わしが馬鹿だったとか、赦しを請うている。その中に、そうだったのか、の言葉もあった。悔しがる響きがあり、忠久は違和感を覚えた。何が、そうだったのか――訊きたくとも口は利けないし、大旦那が応えるはずもない。気にかけているうちに、大旦那の呻き声はやんだ。殺されてしまったのだろうか。義助の場合も事は静かに行われた。確かめたいが、確かめようにも身体が動かない。背後で何が行われ、どうなったのか、まるで分からない。もどかしい気持ちでいると瞼が重くなり、忠久は眠たくなってきた。いよいよらしい。狂ってしまったくうに食らいつかれるのは間近なようだが、お桂はどうなってしまうのだろうか――。

いつ眠りに落ちたのか、忠久には分からなかった。そのうちお桂の母が夢に出てきて――と考えているうちに、忠久は更なる深い眠りに落ちた。お桂の母は夢に出てこなかった。真っ暗な闇の中で忠久は、自分が生きているのか死んでしまったのか分からなくなった。

雀の鳴き声が聞こえ、朝になったようだ、と忠久は思った。瞼を開けたとたん、夕べの出来事が思い出された。くうに殺されるかと思ったが、どうやらまだ生きているらしい。

半身を起こすと、人足頭の与三郎がいた。与三郎は所在なげに、よく手入れのされた庭先を眺めていた。客間だろうか、忠久がいるのは大旦那が眠っていた座敷ではなかった。

「どうしてお前がここにいるんだ？ 目覚めたあとに見たい顔ではないな」と、憎まれ口を叩く。

「こっちも好きであんたの寝顔を見ていたわけじゃない。目を覚ましたら連れてくるように云われてるんだ」

「誰に？」

「決まってるじゃないか、大旦那様だよ」

「生きてるんだな。それじゃお桂さんも？」

「ああ。おふたりともご無事だ」

安堵の温かい血が、忠久の全身を駆け巡る。

三人とも死ななかったのは、お桂の説得の賜物だろうか。しかし、あのときはお桂も口を封じられていた。夢の中で説得したのだろうか。

「何処も具合は悪くないんだろ？ だったら早くしてくれないか。大旦那様がお待ちかねなんだ」

与三郎にせつつかれ、忠久は床から起き上がった。与三郎に付き従って行くと、昨夜の座敷とは違うところに着いた。忌まわしい座敷を避けたのだろう。

中にお桂とお陸と、そして大旦那が待っていた。お桂の嬉しそうな顔がまぶしい。

忠久は下座に座った。大旦那が正面に、お桂とお陸が左斜めにいる。

「末松忠久殿、今回の件ではお世話になりました。そしてご迷惑をおかけしました。お詫び申し上げます」と、大旦那が深々と頭を下げる。

大旦那の人物像は忠久が想像していたのとは違った。もっと気難しくて頑固で、傲岸不遜の人かと思っていたが、意外と柔和である。穏やかな語り口で、物腰も柔らかい。

「いえいえ、わたしは何もしておりません。己の力のなさを恥じるばかりです」

「そう謙遜なさいますな。お桂からあらまは聞いております。奥の憑いた猫を助けてくださったこと、吉助の無事を確認してくださったこと、わたしをお桂と護ろうとしてくださったこと、どれもこれも感謝の念に堪えません」

忠久は赤面の思いだった。いつの間にかそうになってただけで、自ら積極的に関わったわけではない。

「わたしは何も……」

「奥も感謝しておった、良き人に拾ってもらったと。怖い思いをさせて申し訳なかったと云っておりました。嫌な思いもさせたでしょう、わたしからも謝ります」と、大旦那がまた頭を下げる。

「もう結構ですから、頭を上げてください。それよりもあのとき奥方様と何を話しておられたのですか？ 夢の中で話をされていたようですが」

忠久の言葉に、お桂がすぐさま賛同した。

「そうですよ。わたしもあのとき眠らされ、夢に母が出てきたらいろいろ云いたかったのですが、叶わずじまいで。どうして母は赦してくれたのです？ 母は何と云っていたのですか？」

「そう急かすな。順を追って話すから」

優しい笑みを見せると、頭の中を整理するかのようになり、大旦那は天井の隅を見つめた。

奥は生前のままの、人の姿で現れた――と、静かに語り出した。

夢の中でわたしはひたすら謝った。命は惜しいからな。床に額をこすりつけて赦しを請うた。

「初めから殺すつもりはありませんでした。安心なさい。そのことを先に報せてもよかったのですが、お灸を据えたくなりましてね。お顔を上げてください。わたしの身に起こった不思議の一切を話しますから」

そう云われて顔を上げると、鬼のような形相をしていると思っていた奥の顔は、静かな笑みを湛えていた。呆れるというか、気落ちしているというか、そんな笑みだった。

「あなたの早合点にはほとんど愛想が尽きます」と、奥は云った。

「早合点？ しかし、いまわの際に、赦さない、と云ったではないか」

「あれは竹宮様に対して云ったのです。確かにあなたのごことも恨みました。わたしの生家である黒坂家をないがしろにしたのですから。あなたは黒坂家よりも竹宮家を選ばれた、妻の生家よりもこれまで以上に権力を持ちそうな竹宮家につかれた、そのことに憤りを感じていました。商人の才覚としては当然なのでしょうが、人としてはどうなのでしょう」

「それは誤解だ。これまでわしは是々非々でやってきた。黒坂様のご意見も竹宮様のご意見も公平に聞いて、どちらがこの国のためになるのか、そう考えて結論を出してきた。なにも竹宮様だけに肩入れしてきたわけではない。殿の世継ぎの件もそうだ。わしはどちらにも与しなかった。どちらもそれなりに筋が通っているように見え、態度を決めかねていた。ところが……」

「義助ですね？」

何故知っているのだろうかと言いつつも、わしは頷いた。その時点では義助が殺されたことなど知る由もなかったからな。

「義助は竹宮家を押しした。“勢いのある竹宮家についての方が得策です”と申してな。竹宮家は家臣団に勢力を拡げつつあった。多くの中間派を取り崩し、味方につけていった。頑として突っぱねたのは末松家くらいで、態度をあやふやにする家臣は何人もいた。“このときを見誤りますと樽満の衰退は必定。ご決断を”と、わしは義助に矢の催促をされた。そしてわしが所用で他国に赴いているときだった、義助がわしの名代として勝手に話を進めてしまった。わしは怒った。勝手なことをして、と叱った。が、“樽満のことを思えばこそです”と云われては、それ以上叱ることができなかった。竹宮様に、義助が勝手にやったことでしてとお詫びに行ったが、鼻であしらわれた。

“今さら何を云い出すのだ。義助は名代としてやってきたではないか。それを覆すと云うのか”と、けんもほろろに仰り、わしは諦めざるを得なかった。ごちゃごちゃ云うと兵を差し向けるぞ、とでも云い出しそうな目をされていて、恐ろしくてならなかった。わしはすべてを義助のせいにした。義助が勝手にやったこと、精一杯の取り繕いはやった、だがどうにもならなかった――。奥は生家を虚仮にされたと怒るだろうが、それは一時のこと、ときが過ぎれば治まると思った。ところが義助の暴走はとまらなかった。義助は竹宮様に軍資金を供した。そのときもわしをないがしろにする義助を叱ったが、“先日の竹宮様とのお約束です。国が強くなければ樽満の繁栄はあり得ません”と云われてしまい、わしは強く云い返すことができなかった。しかし、国を強くするはずの軍資金は竹宮家を強くしただけだった。その金で軍備を強化された竹宮様に、黒坂家は滅ぼされてしまった」

悔悟に顔を歪めるわしに、奥は冷たく云った。

「病床のわたしは信じられませんでした。黒坂家が襲われたのもそうですし、樽満のお金を遣われたことが信じられず、驚きました。あなたが関与していないはずがなく、落胆し、憤激しました」

「無理もない。わしは何も云ってなかったのだからな。すべてを義助のせいにしてしようとしている自分が卑怯に思え、お前には何も云い出せずにしたのだ」

「そんな事情を何も知らなかったわたしは、あなたを恨みました。あなたのせいで黒坂家は滅ぼされた信じ込んでいました。そしてわたしは、恨みを抱いたまま死んだのです、赦さないの言葉を残して。あなたを恨んではおりましたが、わたしが赦せなかったのは直接刃を向けた竹宮様です。見解が違うからというだけで、強大な力でもって生家を滅ぼした竹宮様のなさりようです。あまりの仕打ちに、わたしは憤死しました。激しい恨みを抱いて死んだせいでしょう、気がついたらわたしはこの世をさまよっていました。

怨念の塊となってふわふわと本屋敷の周りをうろついていました。もちろん、あなたに復讐を果たすためではありません。竹宮様への恨みとお桂や吉助が気がかりだったからです。吉助はまだ幼く、母の死を乗り越えられるかどうか危うく思えましたし、お桂がいい人に巡り会えるかどうかも確かめずにはいられませんでした。そこへ一匹の猫が現れました。お桂とともに可愛がっていた野良猫です。あれに憑いてふたりの行く末を見守ろう、そう決めるのに時間はかかりませんでした。猫に憑いたわたしは、わたしの葬儀でお桂に会いました。声を気味悪がったものの、お桂はたいそう喜び、猫がわたしの生まれ変わりだと云い始めました。葬儀の場に現れたという状況のためか、あるいは生来の勘の良さで何かを察したのでしょうか。嬉しがるお桂に対し、あなたは恐怖の目で猫を見ました、まるで化け物を見る目で。まあ、化け物には違いありませんでしたけど」

そう云うと奥はいたずらっぽく笑った。わたしも苦笑した。

「負い目があったから、あのときは本当にお前が復讐をしにきたと思った。それが早合点だったわけだ」

「そうです。猫に憑いてふたりの子たちを見守ることだけを考えておりました。もとより、竹宮様への復讐は機会をみてやるつもりでした。ところが恐怖に染まったあなたは、猫を近づけさせようとしませんでした。そればかりか、猫の始末をさせようとしたのです」

「それは違う。わしが義助に命じたのは、猫を何処か遠くへ追い払え、ということだった。始末するとか、そんな罰当たりなことは考えてもみなかった」

「わたしもあとで知りました。義助もまた使用人に命じたのです、川に流せと。溺れ死んでほしいとの思惑があったのです。しかし、わたしは運良く末松家の末弟である忠久様に拾われました」

「末松家の末弟？ 侍を捨てて百姓になったとかいう……」

「ご存じでしたか」

「詳しくは知らん。ただ、思い切ったことをなさるお方だとは思っていた」

「忠久様が拾ってくださらなかったら、わたしは猫に憑いたまま死んでいたことでしょう。そのときは自分の中に潜んでいる妖力に気づいていませんでしたから。まあ、すでに死んでいるわたしが再び死ぬというのも変な話ですが」

奥は自分で云っておいて、くすくす笑った。わたしもつられて笑った。

「死に損なったお前は再び本屋敷に現れた」と、わしは軽口を云った。

死に損なった、の言葉が可笑しかったのだろう、奥は声を立ててまた笑った。そして、急に真顔になった。

「義助は再び使用人に命じました。今度は、はっきりとした始末です。本気で猫の殺害を指示したのです。義助もあなた同様、猫に憑いたわたしを甚だ恐れておりました。どうしてそんなに恐れるのか、不審に思いながらわたしは、使用人の繰り出した鎌口からからくも逃れました。普通の猫でしたら殺されていたでしょうが、そのとき、わたしは自分に妖力があるのを知りました。躲せないはずの鎌口を躲せたのです。少しばかり喉に傷を負いましたが。妖力があるのを知ったわたしは、試しにふたりの使用人を眠らせました。殺してしまうのは忍びなかったのです。義助がやらせたことですからね。術は上手くいき、祟りの噂が拡がりました。それは好都合でした。竹宮様とて多少なりとも己のしたことに疚しさを覚えられるでしょうから」

「眠らせた使用人はどうなった？ 今も眠ったままなのか？」

「ご安心ください。本屋敷を襲う前に目を覚まさせておきましたから、他の使用人たちとともに逃げたはずですよ」

そのときわしは、奥が本屋敷にいる義助を襲ったことなど知らなかった。

「わしが本屋敷にいると思ったのか？ いや、違うな、わしに復讐をするつもりはなかったようだから。義助か？ 義助を襲うつもりだったのか？」

奥は頷いた。

「どうして……どうしてそんなことを？」

「その理由は追々。とにかく、これ以上本屋敷に近づこうとしても無駄だと悟ったわたしは、唯一の拠り所だった忠久様の家を目指しました。途中で四匹の犬に囲われましたが、妖力でもって難なく撃退しました。忠久様はわたしを迎え入れてくださり、鎌で負った傷を懸命に手当てしてくださいました。感謝しても感謝しきれません。自分の妖力で治せるかと思ったのですが、どうにもできないことはあるようです。傷の治りを待つ間、忠久様やお梅さんと楽しく過ごしていましたが、竹宮様への恨みを忘れたことはありません。そして、傷の癒えたわたしは挙行に向かったのです、祟りを恐れた竹宮様が身を隠すかもしれないと思ったものからです。

逃げられないようにするために竹宮様を眠らせ、呼び寄せられる限りの猫を集めました。竹宮家にいる家人たちに邪魔をさせないためです。大勢の侍が相手では分が悪いと思い、猫たちの力を借りました。

おかげで難なく屋敷に侵入したわたしは、そこにひとりの男を見ました。わたしたちの侵入を全く知らなかったその男は、家人にも知られないようにして竹宮様と密会しておりました。眠ってしまった竹宮様を前に、おろおろとして、為す術なく立ちすくんでいたのです。わたしはその男も眠らせました。そして問い質しました、お前は何者だ、と。男は何も答えませんでした。意外と肝が据わっているようで、“早く殺せ”と云うのです。

目の前に竹宮様がおられましたから、その男のことは無視して竹宮様を討ってもよかったです。やはり気になります。逸る気持ちを抑え、わたしは竹宮様に同じことを訊きました。竹宮様も初めは渋っておられましたが、黒坂家の崇りを聞き及んでおられたようで、化け物が相手ではどうせ殺されると観念され、薄ら笑いを浮かべながら男の正体を明かされました。竹宮様が密会していた相手は……隣国の間者だったのです」

「間者？ 何故そんな男と会っていたのだ？ 竹宮様は隣国との和平に奔走されていたが、そのための話をされていたのか？」

竹宮様のお働きは知っていた。殿が亡くなられ、隣国に攻め込まれるところを交渉によって阻止していると聞いていた。そのための密会かと思ったが、違っていた。奥は怖い顔でわしに云った。

「竹宮様はすべてを話されました。交渉をなさっていたのは事実ですが、それはこの国を思っていることではなかったのです。己のためでした。竹宮様の頭にあったのは、己の保身とさらなる出世だったのです」

「保身は分かる。隣国との密接な協力関係を築けたとあれば、この国において竹宮様の地位は盤石となるからな。だが、さらなる出世とは何だ？ いまでも家臣の中では抜きん出た存在ではないか。……まさか！」

そのまさかだった。竹宮様はとんでもないことを企てようとしていたのだ。

憎々しげに奥は話を続けた。

「竹宮様はわたしが思っていたよりも悪い人でした。竹宮様はこの国の乗っ取りを企み、そのために隣国との交渉を行っていたのです。隣国の後ろ盾を得ることが目的で、その見返りとして国の一部を割譲するとまで約束されたのです。

乗っ取るために、病弱な兄君を推され、反対していた黒坂家を滅ぼされたのです。長兄が家督を継ぐのが当然などともっともらしいこと仰っていましたが、すべては己の野心のためだったのです。病弱な兄君が二、三年のうちに亡くなるの見越し、それまでに、亡き殿の御霊前を弔うためにとか理由をつけて、弟君に剃髪を勧める――そんな計画を練っていたとか」

わしは呆然となった。にわかには信じられず、何かの間違ひではないかと思った。奥を疑うわけではないが、話があまりに突拍子もなく、まともに考えることができなかつた。ところが奥は、もっと信じられない話をした。

「竹宮様が国の一部を譲るとまで仰ったのに、それだけでは飽き足らず、隣国は金まで要求してきました。竹宮様は難色を示されましたが、何処から聞き及んだのか、樽満から竹宮様に金が渡っていたのを隣国は知っておりました。金を渡せ、さもなければお主の企みを世間に知らしめるぞ――そう脅されたそうです。竹宮様に選択の余地はありません。野望を遂げるには隣国の言いなりになるしかなく、その脅しはそのまま義助に向けられたのです。義助もまた拒絶できませんでした」

「義助か……。あいつも哀れな男だ。竹宮様に肩入れしたばかりに……」

「何を仰いますか！ そんなに悪いやつではないとでも仰りたいのですか！」

奥は気色ばんで云った。

わしは雷に打たれたように圧倒された。そんな奥を見るのは初めてだった。

「いや、そういうわけでは……」

しどろもどろのわしに、奥はなおも怒声を浴びせた。

「義助は悪い男です！ 極悪人です！」

わしは待った。奥の気が鎮まるのを待った。やがて奥はその理由を口にした。

「竹宮様が国の乗っ取りを企んでいたように、義助もまた樽満を我が物にしようと目論んでいたのです。わたしたちの大切な樽満を盗もうとしていたのです」

「いくらなんでも……。それでは、義助はわしを殺すつもりだったのか？」

「義助に人を殺す度胸はないでしょうし、あったとしても企みがすぐに露呈してしまいます。そこで竹宮様の力を借りるつもりだったようです。竹宮様の家人に、不逞の輩の格好をさせてあなたを襲う計画だったとか。そのあとお桂を嫁に出し、残った吉助もいずれ殺すつもりだったようです」

「吉助までも……」

わしは絶句した。怒りで身体が震えた。

「竹宮様はあなたを亡き者にし、義助に樽満を乗っ取らせて樽満の金を自由に使えるようにしようという魂胆だったのです。わたしは、あなたはてっきり竹宮様の言いなりだと思っていましたが、竹宮様に異を唱えることもあったそうですね、見直しましたよ」

奥に褒められることなどなかったから、わしは年甲斐もなく照れた。奥の話は続く。

「義助の真の姿を知ったわたしは、竹宮様と間者を噛み殺したあと、本屋敷へ偵察の猫を送りました。その足で義助も殺すつもりでいましたが、義助もあなたも僅かな差で本屋敷を抜け出したあとでした。逃げた先が浜屋敷なのは察しがつきましたので、そのまま街道を浜町へ向かいました。ところが初めての人殺しと慣れない妖力を使ったせいで、わたしは思った以上に疲れていました。忠久様の家に近づく頃にはもう歩くのがやっとで、忠久様とは顔を合わせたくなかったのですが、仕方なく家に入りました。

留守だった忠久様が程なく戻られ、何事もなかったかのようにわたしの世話をしてくださいました。血まみれのわたしを拭いてくださったのです。涙が出るほど嬉しかった。

忠久様が優しくしてくださればくださるほど、わたしは心苦しくなりました。人を殺したあやかしのわたしに関わっているのは、忠久様にきっと不都合なことが起きるだろう、嫌な目に遭わせてしまうだろう、そう思うと、いつまでも甘えているわけにはいかないと決心したのです。

翌日、疲れがとれ、浜屋敷へ向かおうとしましたが、昼間は妖力が利かないようで他の猫を集めることができず、仕方なく忠久様について畑に出ました。早く日が暮れないかと、そのことばかり考えていたわたしはお桂が来ると聞き、複雑な思いがしました。会いたいのはもちろんですが、会ってはいけないような、変わり果てた姿を見られたくないような、そんな思いでした。一度は一目でも会いたいとの気持ちが勝り、お桂の手に抱かれましたが、結局、あやかしである己の姿が恥ずかしくて桶に戻りました。お桂を悲しませたのは分かっていました。ですが、どうすることもできませんでした。

やがてお桂たちは忠久様の家を出て行きました。お桂のことが気がかりだったわたしはあとをつけ、お梅さんの家の、屋根の上で聞き耳を立てておりました。すると、浜屋敷の与三郎が人足を引き連れて来るではありませんか。忠久様の家に入り、留守だと知るとすぐにこっちへ来ましたので、わたしは身を隠しました。これは何かあるなとにらみ、話を聞いておきますと、あなたは浜屋敷に残り、義助は本屋敷に戻ったとか。そのあとひと騒動ありましたが、ただの猫に過ぎないわたしは見ているしかありませんでした」

「ひと騒動？ 何があったのだ？」

「与三郎があなたの命でお桂を無理から連れ戻そうとしたのです」

「お桂の姿が見えなかったからな。聞けば猫を探しに行ったとか。わしが竹宮様を殺した猫に殺されるかもしれないというときに、その猫を探しに行ったのだから、わしは裏切られた気がした」

「お桂がわたしとともに、あなたに復讐を果たすとでも思われたのですか？」

奥は笑みを浮かべ、からかうように云った。わしが困っているのを愉しんでいた。

「すまない。そうとしか思えなかったのだ。次に殺されるのはわしだと信じ込んでいたから、何もかもがわしに仇をなすのではないかと疑ってしまった」

これ以上責めては酷だと思ったのか、奥は理解を示すように頷いた。

「その話はもういいでしょう。それよりも、あなたにも見せたかったものです、忠久様の見事な太刀さばきを」

「相当にすごかったようだな。さすがに元侍の面目躍如と云ったところか」

「戦場でしたなら、五人の人足も与三郎も、あっという間に斬られていたでしょう。慈悲の心で命を助けてもらったというのに、与三郎は隣家のお梅さんを人質に取りました。お桂が浜屋敷に戻ると云いまして、事態は収まったのですが……」

奥が思い出し笑いをした。

「何が可笑しい？」

「いえね、お梅さんがあなたを叱ってやる云われましたものですから」

「わしを叱る？」

「与三郎に卑怯な手を使わせた、あなたの根性を叩き直してやると、すごい剣幕で仰ったのです」

「与三郎は愚直なきらいがあるからな。やり過ぎたようだ。だが、そうさせたのはわしだ、そのお梅さんとやらに謝らねばならないな。お前がお世話になったようだし、お礼も云わないとな」

「その日が来るのが楽しみです」

奥は微笑んで云った。奥の話は続く。

「屋根の向こうに隠れて見ていたわたしは、与三郎がお桂を連れて行くと屋根を降り、本屋敷へ向かいました。忠久様がついてこられましたので、邪魔をされるのではないかと恐れましたが、わたしが義助を殺すはずがないと思われたのでしょうか、ただついてこられるだけでした。別の目的があると思われたのかもしれませんが。

本屋敷に着くと、義助は予期していたかのように護りを固めていました。侍などを雇ったようですが、こちらもそれを見越して猫の大群を集めておりましたので難なく侍たちを追い払えました。困ったのは板戸です。妖力で持っても開けられませんでしたが、猫たちが束になってもびくともしないようでしたので、しかたなく土壁に穴を開けることにしました。意外にも土壁はもろくてまもなく穴は開き、そこから眠らせておいた義助の座敷まで、わたしは飛ぶように駆けました。

途中で吉助を見かけたときは立ち止まって声をかけたくなりましたが、自分はいまあやかしであるのを思い出し、猫たちに、子供にはひと爪も触れるな、言い聞かせて先を急ぎました。わたしが義助の夢に入り込みますと、義助は泣いて詫言いました。竹宮様に騙され、脅されていたのだと、泣きじゃくりながら云いました。長年親しんできた義助ですから、わたしの心は動きましました。竹宮様が亡くなりたいま、義助も心を入れ替えるのでは、と思ったのです。それは儚い望みでした。

わたしが逡巡していると、居直ったかのように義助は手を伸ばし、わたしの首を絞め始めたのです。もちろん夢の中ですから、人の姿をしていてもわたしは痛くも痒くもありませんでした。義助はわたしの首を絞めながら、「いつまで我慢すればいいんだ！ もううんざりだ！ わたしはいつまでも人に使われるような男ではないんだ！」と喚くのです。わたしは義助の本心を知りました。義助は竹宮様に唆される以前から己の境遇に不満を抱いていたのです。竹宮様もあなたを目障りに思っておられましたから、ふたりの利害は一致しました」

「そして、殺そうと企んだ……」

「そうです。その話をまさにしているとき、忠久様が座敷に入っただけで、忠久様は状況がお分かりではありませんでしたから、義助を助けようとなさいましたが、わたしにとっては迷惑この上ないことです。とっさに忠久様の動きを止めました。あとで考えると眠らせればよかったのですが、義助の話の続きを早く聞きたかったわたしは余裕をなくしていました。話を聞いているうちに忠久様の存在をすっかり忘れ、そのあとにわたしが起こした惨劇を見せてしまうことになったのです。わたしの残虐さを見せてしまい、かえすがえすも残念でなりません。

義助の話では、半年先か一年先か、黒坂家で起きた惨劇のほとぼりが冷める頃を見計らって、あなたを殺害する計画だったとか。事件が続くとふたつにつながりがあると疑われかねませんので、すぐには実行しなかったのです。

そして突如、義助は不敵な笑みを浮かべ、“いずれ吉助が樽満を継ぐのだろうが、あの馬鹿面では潰してしまうだろうな”と云ったのです。わたしは何の躊躇もなく、義助の首に食らいつきました。竹宮様のときもそうだったのですが、獅子のようなものに変化し、長く伸びた牙で噛み殺しました。自分の中にあったあやかしの観念がそんな姿に変えさせたのでしょう。

義助を殺したわたしは、疲れた身体を休めながらここへ向かいました、あなたと話をするために。目的はふたつ。ひとつはお聞かせしたように、わたしに起こった不思議のすべてを知ってほしかったから。初めはただの仇討ちでした。しかし、裏でいろいろなことがなされていると分かり、竹宮様や義助の企みを未然に防ぐことができました。それは褒めてもらってもいいほどの働きだったと思います。そうは思いませんか？」

奥は得意げに云った。わしからの賞賛の言葉を待つその顔は可愛らしかった。

「ああ、お前はよくやった。お前があやかしとなって竹宮様に復讐を果たさなかったなら、この国は竹宮様のものになっていたかもしれない。わたしは殺され、樽満は義助のものになっていたことだろう。本当によくやってくれた。お前に殺されるかもしれないと思っていたのに、そのお前に命を助けられるとは、わたしは云いようのないほどに浅はかだった。お前の心持ちが何も分かっていなかった、赦せ」

「赦すも何も……」と、奥は首を振った。

「それで……もうひとつの目的とは？」

「お桂です」

「お桂？」

「わたしの心持ちがお分かりにならなかったように、あなたはお桂の心持ちもお分かりになっておりません」

「それは……否めないな」

「黒坂家の一件でお桂はあなたを恨んでおりますが、心から嫌っているわけではありません」

「そうだといいのだが、わたしにはそうは見えなかった。心底軽蔑し、嫌悪する目をしていた」

「それは情愛の裏返しです。こうであってほしいと思えば思うほど、その期待が外れればその失意は大きくなります。お桂はあなたを慕っております。それは間違いありません。もっとも、わたしの方を少しばかり余計に慕っているようです」

軽口を叩き、奥はくすりと笑った。

「少しばかりではない。雲泥の差だ。まあ、ほんの少しでも慕ってしてくれたのであれば嬉しいが……本当にそうなのかな」

わたしは苦笑した。お桂が慕っていたなどと、にわかには信じられなかった。

「お桂を信じてください。あなたのその自信のなさがお桂に余計な懸念を抱かせるのです。もっとどっしりと構えてお桂に向き合ってください。お桂には惜別の言葉をあえて何も云っておりません。あなたの口から伝えてください、ふたりを残して死んでいったわたしがいかに無念であったかを。そしてこれからの、お桂の行く末を話し合ってください。真摯に云えばお桂は分かってくれます。吉助のこともお願いします。まだ幼い吉助に将来を云って聞かせるのは無理でしょうから、とにかく、早くに母を亡くした寂しさをどうにかしてあげてください。これはあなたというよりも、お桂やお陸にお願いした方が良さそうですね」

「わしもできる限りのことはするが、それはやはりお桂たちの出番だろう。幸い、吉助はお陸とも仲がいい。お前が気にするほどのこともないだろう」

「そう云われると、それはそれで悲しい気もいたします」

奥はちょっとばかり怒ってみせ、すぐに言葉を続けた。

「戯れ言です。ああ……」と、嬉しそうに吐息を漏らした。

「どうかしたのか？」

「いえ、久しぶりだと思ったものですから」

「何が久しぶりなのだ？」

「こうやってあなたとじっくり話をすることです。いつ以来でしょう、記憶にないほどです」

「初めてかもしれないな。わしも記憶にない。お前は死んでからきちんと向き合って話をすると、我ながら情けない。すまない。生前にもっと理解し合えていたらよかったのに……」

奥が大粒の涙を落とした。

「わたしの方こそ申し訳ありませんでした。わたしは名門の出であるのを鼻にかけていました。知らないうちにあなたのことをないがしろにし、軽んじていたかもしれません。不愉快な思いをさせたことでしょう」

「たとえ軽んじられたとしても、わしは鈍感だからな、気がつかなかったよ」

自嘲するわしに、奥はまた大粒の涙を落とした。

「こうやって話を続けていたいのですが、そうも参りません。最後に……」

奥は涙を拭い、居住まいを正した。

「自分で殺しておいて云うのも何ですが、いま現在、樽満には番頭がおりません。すぐに義助の代わりを務めるのは無理でしょうが、将来は義助以上に樽満の役に立ってくれるはずです。もちろん、本人にその意思がなければ話になりませんが、わたしは受けてくださると思っております」

「忠久殿のことを云っているのだな？」

「ええ。忠久様は末松家にてひと通りの素養は身につけておられます。商売のやり様を覚えられるのにそれほどの時間は必要となさらないでしょう」

「わしは忠久殿を知らない。だが、お前がそこまで云うほどのお人なら、間違いないだろう。受けてくださればいいが……」

奥はひとりで悦に入るような笑みを浮かべていた。何かの思惑を持ったその笑みの理由に、わしはすぐに思い至った。

「お桂のことだな？ お桂と忠久殿を結びつけようというのだろう？」

「お分かりになりましたか。妙案だと思いませんか？ わたしは似合いのふたりだと思います。ふたりが一緒になってくれたらどんなにいいでしょう」

「お前はよほど忠久殿を気に入っているようだな」

「一緒に暮らした仲ですもの」

「一緒に暮らした？ ああ、そうか、そうだったな。紛らわしいことを云うな」

「妬けますか？」

「馬鹿云え」

ふたりは笑い会った。そして、不意に沈黙が訪れた。

ずいぶん長い沈黙だったような気がしたが、実際はそれほどでもなかったのだろう。ただ、このあとの言葉を、お互い云うのも聞くのも望んでいなかっただけだった。しかし、そのときは嫌でもやってくる。やがて奥は真顔になった。

「わたしはもう行きます。あとのことはお任せしました」

「本当に行ってしまうのか？」

「仕方がありません。いつまでもこうしてきたいのですが、この猫に申し訳がありません。身体に障ったというのに、わたしはこの猫を酷使してしまいました」

「具合が悪いのか？」

「そういうわけではありませんが……。わたしは行ってしまいます。ですが、もしまた戻ることができるのでしたら、この次は雀の身体を借りるかもしれませぬ。せつかくあやかしになったというのに空を飛ばせませんでしたから、今度は鳥になって、あなたたちを空から見守りたいのです。鴉は毛嫌いされていますし、鶴は目立ちすぎますし、雉子は山の中から出ませんから雀くらいがちょうどいいのです。やけに懐いてくる雀がいたらわたしだと思ってください」

「雀はどれもこれも似たようなものだ。懐いたとしても区別がつかないだろう。だから……」

「だから？」

「くの字の模様を入れてくれ」

「くの字の模様――変ではありませんか？ 雀ですよ。くの字の模様がある雀なんて聞いたことがありません」

「猫にあったのだから、雀にあっても変ではないだろう。それに、あやかしなら羽を染めることくらいできるはずだ」

「勝手なことを仰って。まあ、できるかもしれませんが……もし戻ってきたらの話ですよ。雀になれるかどうか分かりませんし、ひょっとしたら蝶になっているかもしれません。蝶の前は芋虫です。くの字の模様が入った芋虫でも可愛がってくださいますか？」

「わしが虫嫌いなのを知っていて、わざと云ってるな」

ふふふ、と笑った奥の目から涙が溢れた。次から次に頬を伝う。

ふたりは泣き笑った。

「もう行かねばなりません。お達者で」

泣き笑う奥の姿が薄れていった。

最後に小さく手を振り、奥は消えてしまった。

大旦那の夢の話は終わった。

皆が泣いていた。大旦那は指先で涙を拭い、与三郎はおいおいと、声を立てて泣いている。お桂とお陸は袖で顔を描くし、忍び泣いている。忠久は天井を眺めていた。堪えていたが、涙がこぼれる。手の甲で涙を拭くと、大旦那はお桂に視線を向けていた。優しく慈しむ目をしている。

「お桂、わしはいい父親ではなかった。お前や吉助に、寂しい思いや嫌な思いをさせてきた。申し訳なく思っている。親子だからきっと分かってくれるという考えは甘かったようだ。いや、心の何処かに、それでも仕方がないとあきらめの気持ちがあったのは事実だ、すまない。だが、言い訳がましいかもしれないが、これだけは云わせてくれ。わしの双肩にはあまりに多くの責務が乗っていた。政への参画しかり、商売の差配しかり、使用人たちの暮らし向きしかり。どれもこれも他人に任せてはおけなかった。自分でやらないと気が済まないたちで、ときに義助を頼ることはあったが、ほとんどを自分でこなした。おかげで身体がひとつでは足りなかったほどだ。しかし、それはこれまでのこと。これから先、わしは肩の荷を少しばかり下ろそうと思っている。政に関わるのはやめるつもりだ。商売人のくせに、わしは力を持ちすぎた。柄にもないことをやるとろくなことはない。だから商売に専念しようと思う。そのためにいろんな人を頼り、お桂たちと過ごせる時間を作ろうと思っている。与三郎、お前は人足頭だ、これまで以上に、人足たちの束ねを頼むぞ」

云われた与三郎は目をぱちくりさせ、またおいおいと泣き始めた。もったいないと口にしかけたが、言葉にならなかった。

「お陸も頼む。吉助はまだほんの子供だ、母親代わりが必要だろう。男のわしには気づかない点多々あるだろうから、お桂共々、吉助の涵養の力となってくれ」

「できる限り務めさせていただきます」と、お陸が深々と頭を下げる。

「わたしはいろいろな役割を、その任にある者に担わせたいと思っている。だが、最も頼りにしていた義助は死んだ。しかもわたしを裏切って。わしの右腕と頼んだ義助の役割を誰かに担ってもらわねばならないが、それは信のおける者でないと困る」

そう云いながら、大旦那は忠久に強い眼差しを向けた。

「単刀直入に伺う。忠久殿、樽満に来ていただける意思はおありだろうか？」

お桂の母と大旦那の夢の話を聞いていたときから、忠久は自分の行く末が何処にあるのかを考えていた。侍に戻るつもりはなく、百姓では物足りない自分が何をなすべきか。忠久の脳裏には広大な海原が浮かんでいた。白い波頭をたてて何処までも走り続ける船。その船上で人足たちに差配する己の姿があった。

「願ってもないこと。こちらから是非お願いいたします」

忠久は即答した。

大旦那が満足そうに微笑む。

「その気がないと云われたらどうしようかと思っただが、よかった、よかった。もっとも……お桂が嫌なら仕方がないが、どうだ、お桂、異存はないか？」

「樽満のことに口を差し挟むつもりはありません」

「一緒に暮らすことになると思うが、そのことはどうだ？」

泣きはらした顔を朱くし、戸惑いながらもお桂は小さく頷いた。恥じらいが見て取れ、忠久は身体が熱くなるのを感じた。

大旦那が満足そうに頷き返す。

「そうだと思っていた。奥はふたりを似合いだと云っていたが、わしもそう思う。忠久殿は末松家の出だし……」

話がお桂との婚儀に及びそうになり、忠久は焦った。あまりに性急すぎる。お桂との婚儀は望むところだが、樽満でまだ何の働きもしていないのに、末松家の出だからというだけで話を進められるのは不本意だった。

忠久は大旦那の話を遮った。

「わたしを殿付けで呼ぶのはやめていただけませんか。樽満でお世話になるのですから、ただの忠久で結構です」

忠久がそう云うと、大旦那は困惑の顔をした。末松家の末弟を呼び捨てにはできないらしい。どうしたものかと、大旦那はお桂に目を向けた。

「くうの姿が見えませんが、何処へ行ったのです？」

お桂もまた話題を変えたかったようだ。

「そういえば見当たらないな」と、忠久は呟いた。

くうそのものが夢の中にしか存在しなかったかのように、その姿は見当たらない。猫本来の習性を取り戻して、何処かへふらりと行ってしまったのだろうか。

「わしが目を覚ましたときには、もう猫はいなかった。与三郎、見なかったか？」

「あっしは見ておりません」

「お陸は？」

「わたしも……」

「何処へ行ったのだろうか。夢の中の奥は消えたが、実体の猫が消えるはずがない。遠くへは行ってないだろう、身体がすぐれなかったようだからな。手分けして探してみよう」

人足たちも集めて浜屋敷はもちろん、海岸から河口と探したが、くうは見つからなかった。残されたのは街中の人家だけとなった。おそらく近所の軒下、あるいは天井裏などに潜んでいるのだろうということで近辺を聞き回ったが、成果は何も得られなかった。いくら何でも立ち入って探すわけにはいかず、それ以上の搜索はなされなかった。

いつの日かひょっこり現れますよ、とお陸に慰められ、諦めの悪かったお桂も辺りを見渡しつつ、やむなく浜屋敷に帰った。

忠久は港に向かった。先にくうを探しに来たときに、あとでもう一度、じっくり来ようと思っていたのだった。

浜屋敷にはそれほど感じなかったが、港にまで来ると磯の香りが強い。それは記憶にない匂いで、忠久は自分がこれまでとは違うところにいるのを意識した。

港には大小様々な船が係留されていて、大型船のほとんどは樽満の所有だった。改めて樽満のすごさを思い知らされる。そしてその樽満に一日でも早く慣れ、貢献できる存在になろうと思う。

ひとしきり感慨にふけり、忠久は浜屋敷に戻って厩へ行った。末松家から拝借していた馬を返しに行かねばならない。すぐに返さなくても困りはしないだろうが、親子とはいえ、そのあたりは定かにしておきたかった。

村へ戻り、馬を馬留めに繋いで我が家に入る。ひょっとしてくうが帰ってきているかもしれないと思ったが、桶の寝床は空だった。辺りを見渡しても、狭い家の中にくうの姿はなかった。やはり浜町の何処かにいるのだろう。お桂の母に憑かれたあやかしであり、人殺しではあったが、外見はただの可愛らしい猫にしか見えず、いなくなってみると寂しい。心にぽっかりと大きな穴が開いている。もう会えないのだろうか――。うら悲しさに、忠久の胸は締めつけられた。

と、戸口から顔を覗かせる顔があった。

「蹄の音がしたから忠さんかなと思ってね、そしたらやっぱり忠さんだった」

そう云いながら、お梅婆さんが家の中を見やる。

「どうしたんですか？ 中に入ればいいじゃないですか」

「くうはいるのかい？」

腰の引けたお梅婆さんが恐る恐る云う。仲直りはしたいが、どうにもまだ恐ろしいようだ。

「くうはおそらく浜町でしょう。こっちにはいないと思いますが……」

「それが、戻ってきたんだよ。朝方、見かけたんだ。なんだか疲れ切ったように元気がなくてね、忠さんの家に入っていったんだけど、それじゃまた出て行ったんだね」

皆で探している間に、くうは帰ってきたようだ。ここを我が家と決めているのだろう、それは嬉しかったが、身体が弱っているのが気になった。お桂の母に憑かれたせいで命を縮めたに違いない。

お梅婆さんがもの問いたげに顔を近づけた。

「それで……夕べは何があったんだい？ 気になって仕方がなかったんだよ」と、怖がっているくせに好奇心に満ちた目で云う。

忠久は本屋敷と浜屋敷で起こった出来事を詳らかに話した。

お梅婆さんは、義助があやかしに食らいつかれる場面ではおぞましそうに眉をひそめ、大旦那と奥方との夢の話では哀切に涙を落とした。

「奥方の気持ちは痛いほど分かるよ。ずっとくうに憑いていたかっただろうねえ。恐ろしいあやかしだとばかり思っていたけど、なんだか可哀想になってきたねえ」

「わたしもそう思っていました。復讐のために猫に憑き、その怨念のせいで狂ってしまったと思っていましたが、くうは狂ってなどいなかった。ずっと子供たちのことを考えていたんですね」

「そうだねえ。子供たちへの情愛が、心まであやかしになるのを食い止めたんだらうねえ。そのおかげで大旦那とお桂さんは和解できた。めでたしめでたしだねえ」

忠久は黙って頷いた。お梅婆さんと話をしている間も、その目は戸口に据えられていた。気味の悪い例の、びゃあ、の鳴き声をたてて、くうがいまにも姿を現すのではないかと期待していたが、何の物音も物陰もなかった。

「ところで……馬に乗ってきたけど、何処かへ行くのかい？」

「ええ。これから父上のところへ馬を返しに行くんです。いろいろ話しておかねばならないこともありまして……」

「いろいろ？」

お梅婆さんには日を改めて話をするつもりでいたが、あまりに興味深そうな顔をするので話さないわけにはいけなくなった。

「実は……樽満で働くことになりました」

目を丸くして驚いたお梅婆さんは、すぐに溢れんばかりの笑みを湛えた。

「ということは、婿入りが決まったんだね。おめでとう、忠さん。そうなるんじゃないかと思ってたんだ」と、嬉々として云う。

婿入りどころか婚儀さえ決まっていない。お桂の気持ちもまだはっきりしていない――。

忠久はひきつりそうな苦笑を浮かべた。お梅婆さんに悪気がないのは分かっているが、先走る癖は何とかならないものか。

「決まったのは樽満で働くということだけです」

「なんだ、そうなのかい。でもいずれは」

「急いで馬を返しに行かねばなりませんので」

お梅さんの言葉を遮り、忠久は逃げ口上の嘘を吐いて馬に跨がった。

物足らなそうな顔をするお梅婆さんをあとに、街道を駆ける。

幾分冷たさが感じられる風を身体に受けながら城下に着いた忠久は、すぐに生家へは行かずに、まず樽満の本屋敷に向かった。夕べの出来事はくうが見せた幻だった気がする。確かめに来てみると、廃墟と化した本屋敷は厳然としてそこにあった。土壁には穴が穿たれ、庭も屋根も、開いた板戸から見える至る所が荒れていた。深閑としていて中には誰もいない。祟りを恐れているのか野次馬さえいなかった。忠久は一瞥しただけで馬を走らせた。目的は果たせし、知っている者に見られでもしたら、あやかしの関わりをますます疑われかねない。

下男の春吉に馬を預けて父に会いに家の中へ入ると、父は忠久が来るのを予期していたかのように、座敷で待っていた。夕べの、“話はまだ終わっていない”の続きをするつもりなのだろう。

「馬をありがとうございました。お陰で浜町に早く着くことができました」

「樽満の大旦那は無事だったようだな」と、父がすました顔で云う。

父の早耳に、忠久は虚を突かれた。早くも誰かが報せに来たようだ。

「よくご存じで」

「わしは地獄耳だからな。隣国の家臣のひとりが放逐されたのも知っている。なんでも、殿様の意に沿わないことを勝手にやったらしい」

何の話をするのだろうと忠久が怪訝な顔を見ると、父はにやりと笑った。

「そいつは、自国がいまにも攻めるような話をでっち上げ、和平のためと称してこの国の重臣のひとりと接触してきた。その重臣は取り込まれ、あろう事かこの国の乗っ取りまで企んだ。隣国の家臣に入れ知恵され、まんまと騙され、金まで要求されたとか。その拳げ句に恨みを買って、殺されてしまった。誰のことだか分かるな？」

「竹宮様ですね」

父が苦り切った顔で頷く。

「野望に目がくらんでしまって簡単に騙されてしまったのだろうな。馬鹿な男だ。隣国の殿様は戦なんぞ念頭になかった。民の暮らし向きがよくなることを考えておられた。しかし、この乱世だ、そのために必要とあれば戦をなさるだろう。それ故にこちらとしては備えを怠るわけにはいかない。あやかし騒動は終わったようだから、どうだ、村へは帰らずに、このままここにいないか？ 黒坂家は滅亡し、竹宮様があやかしに殺されたせいで崇りを恐れた多くの家臣が逃げた。お陰で城中は人手不足だ。そこでお前にも助力を頼みたい。お前が戦を好まないのは知っている。ならば城の中で政務に励んではくれないだろうか。悪い話ではないだろうか？」

父は色よい返事がもらえるものと確信して笑みを浮かべている。

「せっかくのお話ですが……お断りいたします」

にわかにかに父の顔がかき曇った。

「何故だ？ 何が不満だ？ そんなに百姓がいいのか？」と、不機嫌を顕わに訊く。

「わたしは樽満で働くことになったからです」

「樽満で？」

「そうです。大旦那様に請われまして、わたしはふたつ返事で承諾しました」

「百姓の次は商人か。どうしてお前はそうも節操がないのだ。悪いことは云わん、やめておけ。お前に商人が務まるものか。下げたくもない頭を下げ、おべっかや世辞で相手の機嫌を伺うような真似がお前にできるのか？ できるわけがない」

どうして祝福の言葉のひとつも云えないのだろうか。

頭ごなしに否定する父に、忠久は憤りさえ覚えた。

「正直、苦手です。ですが、それは侍も同じでしょう。主君のために命を投げ出すことは、究極のご機嫌伺いではありませんか」

「たわけたことを……。不忠義者め！」

父の顔が怒りで紅くなる。まさに鬼の形相で忠久を睨みつける。手元に刀があったなら抜いていたことだろう。

ここで怯んではいけない、戸忠久は思った。

「わたしはわたしのために、わたしの喜びのために命を全うしたいと思っております。誰かのために命を賭すのはやぶさかではありません。しかしそれは、そうしたいと己の心の内から自然と湧き出てくるものではないでしょうか。命を賭す相手が生まれたときから決まっているなど、わたしは承服しかねます。自分の命も行く末も、自分で決めたいと思います。手前勝手とお思いでしょうが、それで構いません。大旦那様からお話をいただいたとき、船上で大海原を駆ける己を夢想して、打ち震える思いがしました。まさにこれだ！ と思ったのです。船のことはまだ何も分かりませんが、ゆくゆくは大陸とも交易したいと考えております。大陸には多くの可能性があります。珍しい品々もあるでしょうし、こちらのものを高く買ってくれるかもしれません。夢物語だとお笑いになるかもしれませんが、すぐには無理でもいずれそんな日が来るとわたしは信じています」

鼻で笑われると思った。が、怒りの収まった父は笑みを浮かべているものの、そこに軽蔑の色はなかった。秘密めいた企みをする者の笑みがあった。

「大陸との交易か、大きく出たな。しかし、そうなれば樽満はますます盛んになるわけだ。大陸との交易は、お前が陣頭指揮を執るのか？」

父の企みが見えた忠久は、釘を刺しておく必要があると思った。所詮、父も竹宮様と変わりがない。樽満を利用することしか考えていないようだ。

「わたしが樽満に行くことで末松家との結びつきが強くなるとお考えでしょうが、悪く思わないでください、是々非々でやらさせていただきますので」

「樽満の大旦那は何かと云えば、是々非々と云っていたが、早速感化されたか。実の父より赤の他人が大事なようだな」と、嘆息して父が云う。

寂しさのこもった父の嘆息に、忠久は自分が思い違いをしていたのではないかと思った。竹宮様のように樽満をただたんに金蔓と考えたのではなく、自分との繋がりが保てると考えたのではないだろうか。が、そう思ったところでもう遅い。お互いの間に横たわっている根深い確執のせいで、忠久は何も云えなかった。元気で暮らせという父に、忠久は頭を下げただけで辞去した。

門戸に春吉がいた。訝しそうに忠久を見ている。

「お帰りになるのですか？」と、非難を込めて云う。

「ああ。伝えるべきことは伝えたからな」

「お帰りになるということは、お城勤めを断られたのですね。お館様と一緒に働けると愉しみになさっていましたのに。そんなにこの家がお嫌ですか？」

「嫌とかそういうことではない」

「では何故です？ こう云っては何ですが、ただに意地でしょう。わたしのような者が云うべきことでないのは承知しておりますが、云わせてください。もっと素直になっていただけませんか」

「わたしは素直だ。素直に生きようと思っている。ただ、父とは生き方が違う。それだけのことだ」と云うと、忠久は脇目も振らず、門戸を飛び出した。

忠久は自分が情けなかった。春吉にまで素直になれないでいる。

自分が嘆かわしかった。父は歩み寄りの姿勢を見せているのに、忠久はいつまでも拒絶し、折り合いをつけられずにいる。このままでは乖離は永遠に続いてしまうだろう。どうにもならないかもしれないが、どうにかしなければならぬとは思っている。それには時間が必要だ、引け目を払拭できるほどの時間が。

忠久の心は遠く浜町にあった。すぐにでも樽満での仕事を覚え、ひとかどの存在になりたいが、猫の襲撃によって壊された箇所を修復するために、当分の間、本屋敷も浜屋敷も閉鎖される。忠久は村に留まって再開の日を待つしかなかった。本屋敷の目途はたっていないが、浜屋敷は半月ほどだろうとのことだった。

忠久が城下から村にたどり着いたのは日が暮れる直前だった。遠くの山々を初秋の紅い陽が照らしている。見慣れた景色だが、いまの忠久には新鮮に映った。

家が見えてくると、お梅婆さんが手招きした。待ちかねるように仕草がはやくなる。

「どうかしたんですか？ やけに嬉しそうですね」

「分かるかい？ 本当は驚かせようと思ってたんだが……。さあ、こっちだよ。早く早く」

忠久の袖を引っ張り、お梅婆さんが裏山へ急ぐ。

「裏山で何か見つけたんですか？」

「いいから、いいから」

裏山に入るとすぐに、忠久は何故お梅婆さんが嬉しそうな顔をしていたのかが分かった。

鳴き声がした。いくつものか弱い鳴き声が聞こえる。みゃあ、と鳴いている。

「猫の子ですね。ということは……」

お梅婆さんが喜色満面で頷く。

「くうの子だよ。わしもさっき見つけたばかりなんだ。くうが何処かで死んでるんじゃないかと思ってね、探してたんだよ。ちらっと見かけたとき弱っているようだったし、ほら、猫は自分の死に姿を人に見せないって云うだろ。もしそうだとしたらせめて埋めてあげようと思ってね。そこの先の、藪の中だよ」

お梅婆さんが木々の繁った藪の一角を指さした。周りよりも薄暗く、近づくと子猫たちの鳴き声が一段と大きくなった。腰をかがめて藪の中に分け入ってきた忠久に気づいた子猫たちが、その存在を訴えかけるように一斉に小さな顔を向ける。

そして、くうがいた。懐かしそうな目で忠久を見やり、みゃあとひと声鳴いた。聞き慣れた気味の悪い、びゃあではなかった。本来の声を取り戻したのだろう、可愛らしく甘える響きがあった。

「憑いていた奥方が出て行ったから声が変わったんだろうね」

忠久の横でお梅婆さんが腰をかがめ、目を細めて云う。

「前と違っているので違和感がありますが、やはりこの方が猫らしい」

みゃあ、みゃあと鳴き続ける子猫は五匹いた。全部がくうに似た斑だった。そっと一匹ずつ手に取り、その模様を確かめてみる。そんなことはないだろうと思いつつ、微かな期待を抱いたが、果然、くの字の模様をした子猫はいなかった。

「わしも同じことをしたよ。字になっているような模様がないかと探したんだが、そう上手くはいかないね。それで、どうしようかね？ 忠さん、このまま藪の中に置いとくよりも家に連れ帰った方がいいんじゃないかい？ もう朝夕は冷えるからね」

何かを訴えるような目でお梅婆さんが云う。

どちらの家とお梅婆さんは云わなかったが、自分で飼いたいようだ。やがていなくなる身であるのを考えると、お梅婆さんの家で飼ってもらった方がいいだろう。だが、残り僅かな日々であっても、いや、残り僅かな日々だからこそ忠久はくうと一緒に過ごしたかった。

「待っていてください」

そう云うと忠久は我が家に帰り、桶を手にした。くうの寝床とは別のもので、その中に藁を敷く。五匹の子猫が入るにはちょうどいい大きさだ。

「おとなしくするんだぞ」

藁に戻った忠久は、子猫たちを桶に入れ、裏山から出た。お梅婆さんがあとに続き、くうもついてきた。子猫たちの桶をくうの寝床の横に置く。ふたつの桶に、猫の親子が仲良く並んだ。くうが満足そうに、みゃあと鳴く。子猫たちは桶から出たいのか、みゃあ、みゃあと騒いでいる。

「ここで忠さんが飼うのかい？」とお梅婆さんが少しばかりの不満をにじませて訊く。

村を出て行く忠久が飼うのだろうかと言っている。

「樽満で働き始めるまでの間だけです。その間だけ世話をさせてください。以前のくうではありませんが、そうしてあげたいんです。立派に努めを果たしたのですから」

「ああ、そうだね、それがいい。なにせ国を救った猫だからね。忠さんが浜町へ行ったらわしが大切に世話をするよ」

お梅婆さんが子猫の首を一匹ずつ、愛おしそうに撫でる。

お桂もくうを飼いたいと言いつつ出さずにはないだろうか、と忠久は思った。その気持ちは分かるが、もしそう云ってきたら反対しようと思った。浜町は人が多すぎる。くうが好奇の人目にさらされるのは必定で、そうなったら可哀想だ。猫に襲われた者が仕返しに来ないとも限らない。

会いたくなったら、お桂はいつでもここへ来ることができる。

「早くも懐いたようですね」

軽く云ったのだが、お梅婆さんは子猫が指に顔をこすりつけるのを潤んだ目で見ていた。何故かもの悲しい色があった。

「そうじゃろ、そうじゃろ。わしは猫の子も人の子もあやすのが上手いんじゃ」

人の子とは自分のことだろう。忠久は子供の頃を思った。

お梅婆さんはいまよりもずっと若かった。家族を亡くした悲しみなど微塵も見せずに、末松家で立ち働いてくれた。父に叱られて泣いていると、駆けつけて慰めてくれた。兄たちに虐められているときも味方してくれた。お梅に手を引かれ、城下を歩いたことは何度もあった。お梅が店先の小袖や帯などに目を輝かせていると、忠久も浮き浮きした気分になった。お祭りでは軽業師の妙技にふたりして目を見張り、角力では力士の大きさに驚いたものだった。あれやこれやが思い出される。そして三年前、忠久はお梅婆さんを頼って末松家を出た。慣れない百姓仕事を一から教えてくれ、村人との仲を取り持ってくれた。感謝してもしきれない。

「痛いじゃないか。引っ搔くんじゃないよ」と、お梅婆さんが笑って子猫を叱る。

忠久も笑った。が、とたんに泣きそうになった。自分もお梅婆さんの心を引っ搔いている。

「なんの相談もせずに申し訳ありません。お世話になりっぱなしで……」

「やめておくれよ、そんな話。まるで今生の別れみたいじゃないか。忠さんが行くのは半月先だし、それに浜町へ歩いて行けないほど弱ってはいないよ」

忠久は苦笑いした。感傷的になりすぎた気がする。が、お梅婆さんも哀切を抱いていた。猫をあやす指先がじっと動かない。

押し黙ったあと、お梅婆さんがおもむろに口を開いた。

「寂しがっていると思ったら大間違いだよ。ひとりには慣れてるんだ。この子たちもいるし、忠さんがいなくなったって……。さてさて、わしはそろそろ家に戻らないと」

お梅婆さんは唐突に忠久の家を出て行った。涙を見られたくなかったのだろう。

遊び相手がいなくなって、子猫たちがみゃあみゃあ騒ぎ出した。

「どれ、今度はわたしが遊んであげよう」

忠久が指をさしだして動かすと、子猫たちはじゃれかかった。爪で引っ搔き、噛みつく。

子猫たちを遊ばせながら、忠久は半月先の暮らしぶりに思いを馳せた。重い荷を肩に担ぎ、港を忙しく動き回っていることだろう。船の扱いに慣れなくて、与三郎に叱られるかもしれない。目端の利く与三郎のことだから遠慮がちに、そんなことでは困りますとか、丁寧な言葉を使うに違いない。困りますと云いながら困っている与三郎を想像すると、忠久は可笑しさが込み上げてきた。そしてお桂を想像した。お桂は幼い吉助の手を引いている。街中をそぞろ歩く後ろにはお陸もいる。三人はいろいろなものを目にして驚いたり笑ったりすることだろう。お桂は――

お桂はどう思っているのだろう？

「みゃあ」と、くうが鳴いた。

真っ直ぐに忠久を見つめ、心配するなと云っているように見える。

「そうだといいのだが……」

くうに呟きかけると、くうはまた、みゃあと鳴いた。

今度は、わたしが見守っている、と云っているように聞こえた。

わたしの声が届きましたかとも云うように、忠久をじっと見据えている。

まさか、と忠久は思った。

お桂の母は、まだくうに憑いているのではないだろうか。

あやかしのことだから声を変えるくらい造作ないのではないだろうか。

忠久は首を振った。

たとえそうだったとしても、あやし騒動は終わったことだ。くうをそっとしておいてやろう

。

戸口の隙間から差し込んでいた紅い陽は、いつの間にか月明かりに変わっていた。

子猫の一匹が桶を乗り越えた。すると他の猫も真似をして脱走する。一匹を桶に戻すと、また一匹が外に出る。てんてこ舞いになった忠久は、思わず笑ってしまった。お梅婆さんもこの子猫たちに手を焼かされることだろう。

桶に戻すのを諦め、子猫たちが好きなようにやらせた。四匹は桶を乗り越えて土間を走り回っているが、残りの一匹は勇気が出ないのか、桶の縁に前足をかけて鳴いている。そっとすくい上げて外に出してやると、その一匹は兄弟を追いかけてじゃれかかった。

くうがのっそりと桶を超え、戸口の隙間から外に出る。

子猫たちがぞろぞろとついていく。

忠久も外に出た。くうは東の山を見ていた。月を見ているのかと思ったが、そうではないようだ。視線が低い。くうは山の向こうに思いを馳せているのだろう。山の向こうにはお桂たちがいる。

了